多香島

目次

文書４

文書４ 3

文書５- 前半

文書５- 前半 37

奥書 66

文書４

文書４

文書４（清雅文書 A）
記。被１３縄。虚。
此の間逆短１ケの上ノ。ふるふるとふるふるとふるふると由羅良
私記。
（以下覺書、久村優斗君ノ爲ニ書ク、九月朔。メール。久村君一年ぶりノ連絡クレタ爲。眞夜羽ノ件）
八月末にあなたと連絡したこと、此れ以下の如し。
まず清雅から久村に。
日本へ一度歸ろうと思っているその理由。一、病状の確認（片岡比羽犁（ヒ、バ、リ。女）が確認するだろう。そもそも海外逃亡は彼女は反対だった。日本にいたら死んでいたろう。もっとはやくに。スグサマニ。召されよ。言葉も無くに。ただ、天に米佐禮與）二、眞夜羽の件（此の名前の由来を調べてくれ。）三、こっちの個人的理由（又、女がらみ。更に轉生がらみ）その爲ベトナム人入国のビザが必要。故あなたの協力が必要。故、協力もとむ（保証人になるだけ）
つぎ久村から清雅に。
三、OK。一、これはどうでもいい。又、あなたには無関係。俺には知った事ではない（比羽犁はガリレオの診察でもするべきだ）二、あなたの解答。
確認しておく。その時鳥が或はその感覚の一瞬につがいの所在を確認したように？ 真夜中に鳥が飛んで眞夜羽？ 美しいね。
あなたは云った——あの短い Line 通話。録音しておけばよかった。あなたの咬むような話し方。海を隔て、しかし僕らを隔てる者は其の時になかった。かつて羈旅の歌を詠んだ歌人も詩人も皆ほろびた。Wifi が物理的にころした。故、スティーブ・ジョブスが一体何億人をト殺したか考えればいい。いずれにせよ友よ。
そのかけがえのない友曰く（かならずしもそれが貴方である必然性があるか？）
　眞夜羽の件ね...あれ、あの名前...
　あの名前の件だけど...あれね...（これはまるで序奏部のように。暗示的な？ きれぎれの、ブルックナー風の。決してルートヴィッヒのようにはあるな、と）
是は個人的な想像である（創造でなければいいが...）和哉氏はその實娘をほしがっていたのである。故に。
　生まれたの朝だったらしくてさ。...で、病院を出て...朝、早朝にさ。病院出たら、丁度曙の頃よ。東の空にね...

ひんがしのぬにかごろひのたつみえて

ま、朝焼けよ。靄の中にね...いや、もっとくわしく云う？ 聞きたい？

印象的だったんでしょ？ 下手な言い回しで延々描写してたよ...暇なの。田舎の人、で

かへりみすればつきかたぶきぬ

反対側...病院出た正面が日昇よ。くるっと回って、病院はいろうとしたら、ほれ。そっちの方西だからさ、まだ暗いじゃない？ だから（と、あなたが云ったときおもいだしたのは

ときはなるまつのみとりもはるくれは

いまひとしほの

いろまさりけり

何故？...）思ったらしい、わ、すげぇ、そこだけまだ真夜中だって。で、ちょうどその眞夜中のほうから一斉に鳥が立ったらしいのよ。ざわざわざわっとね（朝霧爾之怒怒爾所霑而喚子鳥三船山從喧渡所見。...と、おそらくは（契冲の名には性的な暗示がる気がする...）

あさぎりにしぬぬにぬれてよぶこどり

みふねのやまゆ

なきわたるみゆ名を、そこに記入してもらえなかった何処かの誰かノ宇多）飛んだ、と。

で、眞夜羽、とつけた、と。

彼に彼を殺させたのは我々でなかったか？ 私たちははなしあった。

清雅曰く、眞夜羽、その和哉を殺すでしょ？（爾時君は聲を立てて笑った）

花匂う君、邪氣もなくに曰く、おれもそう思った。

清雅曰く、名前に咒われてる。殺すしかないよ。今日明日に。

花匂う優斗君、あなたはささやくように耳元で言った、しかも、海を隔てて、古事記でしょ？ と、そうただ一言君は。眉輪王。書紀云、眉輪王。古事記云、目弱王。マユ、マヨ。ユとヨは通い合うのだ。エとヲのように。かくて古へのフルトヴェングラーのコーダ。高鳴る鼓動をだに考慮せずに音が鳴り終われば空中のどこに消えたか？ その答えなどどこにある？

さらにつぎ清雅から久村王に。

戀の話を聞きたいか？

つぎにつぎに久村君は俺に言ったのだ。

興味あるね。珍しいね。そもそもお前が抱いた女を覺えてるのが、稀だよね（笑う）

つぎにつぎにつぎに我君に云ふ、

忘れられない、と。

いやつぎつぎに久村王の給はく。

どうしたの？

故、是は転生のはなしである（ところで、断言しておく、轉生とはことごとくまやかしであり、眞夜羽も久村王も眉村家畜王も悉く狂気していると見なせ、共に、友よ）

・序。亂序ノ一

家畜の歌。
ダナン市（在ベトナム。）
八月。十二日。君は東京にいただろうか？ ならば、その日は曇りだったはずだ。記憶があるなら思い起こせばいい。なくばむしろ死んだほうがいい。生き物としてすでに生きていても無益だからだ（どこかの草の影、ななめにあたる午前於の日差しに死んだ鼠の皮の下に蛆は繁栄する...グロいって？ イノチを嘲弄する豚、ないし自分の豚であることに気付かないふりをした豚の仮構されたエレガンス）。
レ、チャン、タオ、という女。現地人。肌色、極度に白。体重恐らく 50 超。身長 153 か 4、ようするに豊満。肥満の直前。下半身ふくらはぎ及び太もも裏に肥満。見苦しい。いずれにせよ可愛らしい女性。黒髪。眼鏡。視力 0.1 以下。おそらく（眼鏡をはずしたときの眼の細め具合)、又血液型は 90 ％ O 型。10 ％ AB、限りなくゼロに近い確率 A 型。本人は自分の型式を未知、尤もゼロに近い可能性が正解することはよくある事。年齢二十七、未婚、日本に留学経験七年、兵庫にいた。しかし極度の標準語発音。
タオは現日本語教師、クイ氏の紹介で逢った。タオはクイ氏の姪っこである。タオは最初から私に戀した。おそらく、逢う前から戀することを知っていた。仕方ない。女だから。もとよりその爲にしか存在しなかった。消しゴムで抹消してやりたくなるほどに息を潜め目を逸らした凝視。心の眼で眩む迄見つめるしかない。
タオ、その十二日に私の部屋で——ホテルの、今は 7 階に引っ越した。ささやく（甘い聲。鼻に懸かった。すすりかけの鼻水をかみながら話すような。甘えたのではない。もとよりそのようにしか話せないのだ）
耳元にわずかはなれて（極度にはじらった女は抱かれてしなえば距離感を忘れる...埋没してしまうのである）耳をなでまわすうように（家畜どもの花）花咲く家畜どもの鼻のよだれよ、したたれ。
　わたしの妹にあってくれない？
私、答えて曰く（雲。
蜘蛛ではないよ？
空に蜘蛛？
まさか。——それは薄く棚引いて（蜘蛛ではないよ）よこなぐりに（むしろ蜘蛛であれ）そのままに凝って（願わくばせめてささやかに美しい蜘蛛で）そのかたちのままに。
斜めに上空の風に吹かれその儘のかたちで海の方に流れるのだった。
あくまでもその儘。
形、凝固させた儘に...是は窓の向こうの巨大な神游びの話。その下に糞人形はささやくのだ）なんで？
　どうしたの？
タオはかすかに笑い、そして答えたのだった（その微笑の儘に時間など止まって仕舞えばよかったのだった)。ホーチミン市から（サイゴン、陥落の都市、今、アジア社会主義の歓楽の都市よ。）歸ってくるの
　で、...
私——で？ って？
タオ——で、...ん、

私——なに？ ど、した？
タオ——え？
私——どしたの？（耳のそばに笑った）
タオ——なんでもないよ。
時と共に。時など。一切の時など。むしろ流れなければ（時の制止した只中に、それでも聖瞿曇王は沙羅の花、乃至曼殊沙華の洪水を雨として降らさんと画策するのか？
誰の許で？）タオは云った。いい子だよ。
私は云った。いつがいいの？
タオは云った。もうすぐ、歸ってくるよ。
私は云った。お前みたいにかわいい？
タオは云った。ぜんぜん。わたしよりかわいいよ。
私は云った。じゃ、タオはもういらないね。
タオは云った。なに？
私は云った。妹のほうがいいから。タオはもういらないね。
タオは云った。それは違うよ。それはだめだよ。
私は云った。すてられたらどうするの？
タオは云った。すてられないよ。悲しいよ。死んじゃうよ。
十三日。その夜、君は夜に雷をみたろう。東京に居たならば。眞夜羽は星をみたのだ。夜になっても彼の眼が見得るならば。是はその前、午前中の話だ。
空港に行った。タオと。タオ、バイクでホテルに來る。それから二人で行ったのだ。ホテルの駐車場の脇のココナッツの肌に蜥蜴が這う。生きよ。それ以外にあなたに何ができた？
空港で。その名、レ、チャン、ラン。
ランは蘭の羅ン。背はタオよりも低い。幼い。十四、五。乃至三か。そう思った。褐色の肌。瘠せ、骨格は顯らかに想えるほどに太い。しなやかな印象。野生の猫とでもいうか（私は特に日本の、飼殺された不遜な猫もどきを嫌悪する。あれは猫ではない。寧ろと殺用の家畜以下に過ぎない）。
空港のハイランド・コーヒーで休む（彼女の荷物は少ない、ランは——蘭としておく。彼女は、）ハイランドはベトナムがスターバックスを模した国産ブランド。味は薄い。アメリカ風の。当地のカフェはフランス風の深煎り。植民地時代の影響か。フィン、というフランス人がとうに廃棄したかつての道具でカフェを入れる。日本なら博物館にある代物がここでは市場でたたき売られる...タオ。ちゃんと挨拶して（と、むしろ姉の方が駄々をこね）
（姉に）私、——何歳なの？
十四、と。タオは応えた。
蘭は上目遣いに無言だった。
午前十一時、連れだって姉の家に歸る前に（タオは家を建てた。ダナン市のはずれに。それは肉親所有の土地の上にたてなおしたもの。日本でのバイト賃金を貯金したのだ。かの元土地所有者たる親族は今アメリカに住んでいる。もし帰ってきたらどうなるのか？知った事ではない）私のホテルの部屋に、蘭。

眉をしかめて、そして何か言いかけた。
タオは気付かない。
窓際に風。
ゆるい、その風。
何故ならベランダの植栽の葉がかすかに搖る故に。その音もない動搖の刻印。
タオは蘭がいまサイゴンの親族の家にいる事を私に話す。わたしは耳がなければならない。なかった。それなら私はその話を聞き取れなかったろう、それ、人間が人間の耳に認識させるために話す所のそれ、...ヒトの聲。
病院に入っているのだといった。
何故？
言葉を忘れて仕舞ったから、と。
詞？
六歳の時に、それから言葉を話せなくなった。
失語症？
蘭が口を開けた。
姉の背後、壁にもたれ。
姉の眼は見られないだろう、私の眼はそれを見るだろう。ベッドに寝転がって、そして彼女に微笑む私の。故に、蘭はわたしに笑う。
口を開けた儘、頬のかたちで、はっきりと笑ったことを私の眼に焼きつけようとそれ、幼い画策。
横殴りの窓越しの光。なぶるようにタオに。その半身にだけ。
タオは憂い顔に、そして私は彼女を見なかった。ただ聲が...耳は彼女を見詰めないのだ。故に、だれにも見つめられずにタオは、そして光。
友よ、君に葉梨太郎？ 何度も...それ、君に葉梨太郎？ ひかり。いまそれは大文殊菩薩神の光だった、その何千度めかの轉生の、その光が中空の虚ろに我々を満たすのだった。それら、佛らのひかりよ。
こころに祈りのような——無益な単なる感傷である。ひかりはそもそももとより何物をも救おうとはしないのだった。この大文殊ノ牟智ノひかりさえも。...もの、祈りのような、もの。そしてその生じる儘にわたしは一度瞬くのだった。
その同じときに階下、はるか下の正面口の庭先のブーゲンビリアの樹木の影に蛇は這った、そのまなざしの捕えた一瞬の逆光の輝かしさをだに知らずに。
思えば愚かな。
タオ、彼女が云う、ささやくように、二メートルばかりも離れて窓際に立ったままに、いっぱい話して、...と、「蘭が詞、思いださせるように（ママ)」と（願え。
その叶わぬ願いを。
願え...あした
星があなたの額に落ちてくる前に)、
思い出す？
「思いだしられるから。たっくさん聞いたら、きっと、思いだせれるから」
日本語なんてしらないのに？

「思いだせられるから」爾時蛇は頭の上の木の葉のこすれる轟音に身を震わせた。
十四日。爾乃君は見た。その午前、雨を。時には濡れもした。違うか？
眞夜羽は見た、その日のひかりの直射。焼かれもしたろう、その日差しに。
違うか？
忘れた？ なら死ね。
　花を喰う
　喰いちらす蟲ら
　けさ見上げた空に
　わたしは心を吐き出して
　わたしは心を
　そして沈黙に捧げた葉にかかる糸
　默止せ
タオ、九時に笑いながら妹と。朝ご飯をたべたのだ、と。タオ、なぜ詞のない妹と笑いあえたのか？ なぜ？ むしろころせ。
　息を　ころせ
　いきを　ころせ
　あかんぼが　空を　みる
　ああ　空を　みる
是は八木重吉が、おそらくは蘭のその時の一瞬の爲に書くべきだった詩だ。おそらくは此の詩人も失語に墜ちいらなければならなかったはずなのだった。いずれにせよ蘭の見てる前でタオを後ろから抱けば、タオは甘えて拒絶の聲を立てる。
そのゆるい拒絶の爲にわたしはそれをした。
彼女の驕った心の、そして私を失うに違いない痛みに時に眩むそれ、タオの心に、せめて捧げたのだ（ころせ
　その息を
　ころせ
　もうすでに
　死んでしまったあかんぼの
　息をころせ
　死んだまなこが空をみる
　ああ
　空を
　ころせ）。
タオ――これから出勤するからね、ちょっと、お願いするね。
私――がんばって。
タオ――がんばってるよ（と、わざと殊更に憤り）。わたし、いつも頑張ってるよ。
タオは蘭をわたしに預けに來たのだった。
タオの両親は在クアン・ナム市。近隣だがバイクで三十分程度である。弟は今日本である（エンジニア。出稼ぎ労働。妻子あり。在クアン・ナム、妻は両親の家に）。兄はハノイ。
タオはドアを閉める。振り返らない彼女が置き捨てた心が床を咬みながら光に照らさ

れた。
光、舎利弗の光。
無慚な印象、その心。脉打ち、私さえもが顧みないのだった。
大舎利王はちりぢりにひかり蘭が残った。
ひとりではなかった。
わたしと、わたしの心だにも滞在したのだった。彼女の眼差しの寸前に。
一人になったむしろわたしで、わたしは故にひとりでシャワーをあびたのだった。
飛び散る水沫に、命さえあれば。
莫迦な。命など手の届かなかった事象のたわむれども。ひかり。
蘭を救え。掬い、すくいあげて飲み干して仕舞え。と。
・序。亂序ノ二
そう私が心に、. . . と。
そう願いさえしたときには. . . と。
散る飛沫飛び散るひまつに。
俺は、飛沫散り飛ぶ飛沫に飛び散る飛沫に、俺は聞くのだった。
飛沫ら。
俺の肌を嘗めて噛み得ず失せる刹那の、それら。
呼応して瞿曇ノ神は無數の飛沫それぞれに濁音つきの「以」の音をひそやかに立てつづけるその連なり合った轟音の切なさは、むしろむごたらしくもあったろうか。
流す汗も無かったものの躰を流した——浄めた、のだろう。かの蘭の爲に、ないし彼女の人の心が噛み千切り続けるその肉体の肌の褐色に、綺羅なる産毛、わたしが濡れた髪の儘に外に出ると蘭は立って窓の外を見ていた（海が！
見えるのだ、
海が！
波立つのだ、
海が！
その綺羅にしろく、空を移して青光り、ついには白の綺羅に失せる、
海が！）三秒後に彼女が振り返るのは知っていた気がした。その、まさに三秒後に彼女が振り返ったときに。わたしはショートパンツだけだった。誘惑ではない。熱帯のまちではよくある。見慣れたもの。蘭はなにか言いかけた。
口を開いた。
おおきく、阿のかたちに（もたげらかけの舌の 25 度のななめのカーヴ)。
叫べ、と。わたしはそうささやきかけてもよかったのだ。喚き散らすにも似て、限りもなくにやさしく——叫べ！
なんと？（むしろ默止せ）
泣きそうなかたちに蘭の顔が崩れるのを見た——気付く。うつくしい少女だった。野蛮なほどに。
品の無いハイビスカスのように。
香気をはぎ取った素顔の薔薇の花のように。おそらくわたしが彼女の美しさに気付いた故に蘭はいきなりに膝間付いてしゃくりあげるのだった。顔を覆って。

思い出す。麻紗彌も...香香美雅美——血まみれの母親。彼女も最後の時、その前にわたしに同じように膝間付いて泣いた、と。
詫び乍ら。
むしろ生まれたことを？
詫び乍ら。
それがむしろ私自身に泥をぬる行爲だったとも気附かずに。とはいえ蘭は蘭であり、相似は同一ではない。わかるか？ 雅彌にわたしに固有性をあたえるように、蘭もまた私が私に固有性を与えたと同じく固有性をあたえられなければ、——どうしたの？
近づき私は云った。
どうしたの？
やさしく。...友よ。友の仮面をかぶった家畜よ。君は笑うだろう？ ことばなどつうじるものかとね？
心から心へ。
知れ。わたしでさえもルートヴィッヒの退屈なミサ・ソレムニスに感動するどころか、オケゲムにさえも共鳴のするのだ。ましてやセバスチャン・B の試作のカノンをや。むかし、808state をたいくつだったと君は云った。わたしはそうは思わなかった。ドライヤーのジャンヌ・ダルクに関しても、12 年から 13 年のリリアン・ギッシュに関してもだ。ハロルド・ロイド、その限りもない映像美への耽溺よ。
　阿阿那ン陀王よ
　阿阿那ン陀王よ
　今、君は人類の苦惱の爲に死ね
　この俺と共に
泣き崩れる野生の褐色の花をわたしは腕にだいて（——彼女は顔を覆ったままに向こうにそらした。私を見詰めない爲、泣いた顔を羞じた爲、そして光の散乱の爲に、煌めきながら、産毛を、それでもなおも生きよ！）ベッドに寝かしつけようとしたとき（生きよ！）不意に我に返ったように蘭はわたしにしがみつき、そして胸に抱いた。
彼女がそれを望むのなら、阿阿那ン陀王よ、私は施す以外になくに想えた。
抱いてやる腕の中に、——ね。
と。
ね。
耳元に。——ね。
と。
ね。
聲を立てて？（俺は過失のようにひとり想う）...日本語？（やわらかい心の斜め下のほうに）
聲。「わたしを、連れてって」
蘭は云った。「わたしを」
聲に。
「...ね」
と。

ね？
わかる？
いずれにせよ、彼女は私を受けたのだった。
その日彼女が（蘭が。花の蘭ではなくて。花のような、人の肌の香に熱帯の光に汗ばむ、それ。人のかたちの蘭が。色彩さえ褐色の、下卑た色しか与えられずに——人とは本来下等な美しさしかみずからに必要としなかった猨と不在の鹿の混血なのだ。事実、その泣き声の意地汚さを聞け）話した言葉はそれだけだった。
話しかけた時には已に彼女は言葉を必要としないところに追い込まれた。
私に埋もれたから。
私に埋もれそうだった一瞬には彼女はまさに（時に。
雪さえも）詞にふれていたのだ（雪さえ。
溶けぬ間にも）。
しかも（雪はやがて我々を掩う。
その最期には）わたしと彼女...即ち私たちには一切かかわりのない他人の言葉に。
それはあくまでも蘭そのものの肉聲でありながら。
わかる？
わからないなら死ね。
蘭は息遣う。肺を、その存在を、それの存在の肉体感覚としては一切脳の知覚しない、故、本質的に忘れられている存在、にもかかわらずに脳の生存の絶対的な根拠であるもの、肺ではなくて。胚でもないくて。這い出るように。こころが。その時に。くらい影から這い出たように。肌で。
蘭は息遣う。
褐色の肌のかすかな幼いおうとつに日の光がひかる故になげたおうとつをあなたは見ようとしただろうか？
あなたは目をそらそうとしただろう。蘭の爲に云、彼女は誘惑したのでも誘惑に負けたのでも無かった。むしろ戸惑い、思いあぐね続けながら、同時にそれらをさえ無きものにする充足を感じていたのだった。
蘭は思った。
自分のにじませた汗が彼女の愛する「美しい人」の肌の、不意うちのようににじませた汗に混ざり合って仕舞う時に、それは蘭の汗なのか。
「美しい人」の？
流された汗に所有格などあったろうか？
ならば、目の前におきていることを何と呼ぶ？
何が起きているのか？
本来、これが彼女の咬んだ戸惑い、思いあぐね、充足のそもそもの実態ではなかったか？
我々はしらないのだ。心がまさに自分自身に一致し、さらに他人の心にだに貪り喰ったように（——喰い貪られたように）完全一致してもはや何物でさえもあり得なくなった時に、結局はまさに我々は何が起きているのか、まったく認識できなくなって仕舞うのだ。これは心情的な問題ではない。
ただ三次元的思考様式の三次元的限界なのである。故、同時に我々は四次元的乃至五次

元的認識処理をまで同じき身同じき時にもて来たらせていることには間違いない（実は、私は蘭にはなしかけようとした。
事実、なんどもはなしかけもした。
日本語で。
行爲の終わったあとに。
彼女はベッドに横たわって、わたしに背を向けていた。
あるいは、窓の外を見ていた。
心の内に、彼女が私を見ながら窓の向こうを見たかった、と、それが本当の本等だったかも知れない。
なんどか、話しかけた。
子供に話す様に。そしてまた、事実こどもだったのだから。
彼女は何も答えなかった。
聞き取れなかったのか。
聞き取れない外国語に、私がひとりごとをささやくのだと思ったのか。
彼女は瞬いた。
恐るべきことに、彼女は今になっても私を戀してはいないのだと、わたしにはそう思われた。)。「行くの。」蘭は云ったのだった。行爲の間に。わたしの耳を咬むように「連れてって。」
どこに？
「行くの」と。目を血ばらせる？ まさか。澄んだ、あまりにも澄んだ目で。息をだけ痛み、屈辱、喜び、所有欲の達成、それらさまざまな感情を、「行くの。」と彼女は冴えた聲で「行くの」と、褪めた聲で、さまざまに。
脉打ったはずの感情の群れをいま、むしろひとつのやわらかい充足に仮構してみせる。
どこに？
「日本に」
なんで？
耳元にささやく私の聲を聞き取れなかったはずはなかったが、あらい息の（まるで私が彼女を虐待しているかの）隠した絶え絶えの聲のこちらで蘭は笑んだ赦しといたわりの色を見せて無機物の眼球に——なにが？
わたしは思うのだった。
いま、なにが起きたの？
と、
なにが？
午後五時に蘭をレ、チャン、タオは連れて行った。
ドアを出る時、蘭は振り返りもしなかった。
タオはわたしの足元に心をへばりつかせたままだった。
それがすりつぶした紫陽花の花の臭気を立てた。
彼女は私しか愛せない。
私を彼女が占有することはできない。それは已に知っている。且つ、報われるとは思っていない。私への愛が、ではない。私を愛した時間の総体が。である。

夜、外出しなかった（雫は散る
散る。
散る。
何故？
晴れ上がる前に隠れるべき必然があったからただその自分勝手な）。
日本の玖瑠実と揚羽から Line。文字メッセージ。夕夏から着信。無視。ベトナム人のハン、ミー、ニーから電話の着信及びメッセージ。無視。故。あなたを想って（雲がわたしの口蓋を満たした）慰めることにした。
あなたが、まだ私に生き物としての興味を持っていた頃を思い出しながら、である。
十五日。
朝、あなたは太陽を見たか？ 同じとき、眞夜羽は太陽が存在する事さえ忘れたままだった。
白濁の空よ。
あなたにとってもわたしにとっても、そして眞夜羽にとってさえその日は木曜日だった。
故にタオは今日も同じ九時に（あなたにとっては已に十一時だったのである。眞夜羽にとっては？ 同じ國にいるからといって、時には同じ場所にいたからといって、同じ時間がながれていた必然性等どこにもない...）蘭を預けに來た。
タオは云った。
此の子ね、綺余さんのことが（キ、ヨ、と——正確にはキョーさん（綺與宇さん）と、彼女は（時に伎夜ウと）私を喚ぶ。
なぜ？
香香美——迦加美も清雅——伎與麻沙も彼女の舌にとっては長すぎるから。
タオはタオだけで一音なのだ。ニュン、も、ニアも、トゥインも、トゥーもなにも、ここで名前はかならず一音であって、キョーではじめて彼女は私を自分たちの慣例にしたしく名前に呼ぶことができたのである...）好きだよ。
タオはそういった。
蘭はいつかタオのかたわらに素直に怖気もなくに立ってそして私にすれ違えばベッドにそのまま倒れこむ（これは性行爲の暗示ではない。
ただ、安息をのみ意味して、そこに）
わたしは（いき遣うのだ）鼻に息を立てて笑った。
そうなの？
タオ。だって、綺ヤ宇のこと、好きなんだよ（と私を敢えてみずにベッドの上の頸筋を見、そしてやがて額を、そしてそのままずれて窓際の鉢の中に立つ緑の樹木...名前は忘れた。
グイン・ヴァン・ロンが持ってきたのだ。
わたしの爲に。
夏の——永遠の夏の。日差しの中に？
彼の筋肉に汗を匂わせて）
知ってる、と。
わたしがそういった時にタオは終に笑った。タオはささやいた——しかたないね、と

（赦します）。タオは、みんな綺與宇さんのファンだからね（と、あえてそう云った。赦す、と。
その希薄な許しの気配の中に、諦めがにおうのに彼女は気付かない。むしろ、彼女が知っていたのは今、自分が、あなたを愛していますと、その告白をだけ繰り返していた事実だったのである）
タオが出て行ったあとにも私は蘭を抱かなかった。
蘭はひたすらスマートホンで音楽を聞いていた。ストリーミングと、Youtube と。それら、月並みな趣味。たとえば billieilish。あとは、正直なところが私には判らない。此処十五年同じ音をしか馴らさないからだ。
わたしは、彼女が英語の勉強をして居る気がした。
そらに御前、鳥が飛んだ。
あれはかもめなのか。
逆光の中、形は終にさらされない。
・小亂聲
その午後ドー・ティ・ヴィンがホテルに來た（いきなりじゃない。
決して。わたしも已に知っていた。前日かれはメッセージをくれていた。ただわたしがそれに気づかなかっただけなのだった）。
ヴィンは驚かなかった。
わたつしが彼の爲だけにドアを開いてやったその向こう、部屋の中にヴィン以外の人間がいる事実に（ヴィンはなれていたろう。已に。
或は彼を私が驚かすことなど出来ないのかもしれない。
最早（例えば私が水星に支えられながら太陽を飲み込みでもしない限りは。
宇宙の存在という、このすさまじい現実よ...）。
ヴィンは笑った。
誰？
私は彼が彼が笑うより先に微笑んでいた。
知らない？
私はそういった。
故、ヴィンは（29 歳。未婚。長身。筋肉隆々（趣味がジム通いだから...このあたりでは一般的）。日本滞在は 7 年。現クアン・ナム在住。男。無職。あるいはなんらかの片手間の仕事？）答えて——教えてよ。
私は謂う——やだ。
ヴィン、——なんで？
爾ようやくにヴィンの存在に気付いた蘭は——やさしい、無根拠にもやさしい目の色。ヴィンを見て、そして私をさえも見、もう一度ヴィンを見、そして目を伏せた。
背を向け、スマートホン画面を見る。
同じくに、ベッドに横たわった儘に。
私は歯ぎしりした（何故...我々の存在のことごくがそこには實には存在しないという留保なき解決をさらしたからだ）。齒はきしらせはしなかった。
あくまでも心の状態の比喩。

ヴィンが（聞け）笑った（そのふるえる気配)。――かわいいじゃない？
清雅。――そう？
ヴィンが笑った。――ああいうの、好きなの？
清雅。――あのこは、好きだね。...おれが？
ヴィンは笑った。――香香美さんは？
清雅。――好きだろうね。お前と一緒。
ヴィンは笑った。――俺と一緒？
清雅。――焼いてるの？
ヴィンは笑った。――楽しくないよね。
清雅。――だったら死ねば？
ヴィンの唇は清雅に奪われた（どうせこの後交通事故で壊れるのである。もうすこし彼は切迫してわたしを求めるべきだった。
出来損ないの豚肉のように。
あるいは、せめてもの人の人たる尊厳を矜恃して。
路上にはらわたを曝した鼠と同じくに。
阿波禮)。我々は（ヴィンはことさらに少女を意識していた。
清雅は彼女のことなど忘れていた。
ヴィンのことさえも。
何を思うべきだったろう？
それはついにわからずにいる...）貪り合った。
唇をだけ。
そしてはだけた乳首と。
頸筋と。
それ以上はヴィンは出來なかったのだった。そもそも我々がそうした下等なる行爲に重きをおきていないのも事実だった（とはいえ、それらは未だにすばらしいもので在るべきなのである。それは人の存在証明のごときものか)。
いま私の心は混乱してる。
故、この時に（まばたく間にも。だから見上げた天井の光の陽炎にも）清雅の心も混乱していたのである。
清雅と美しい肉体のヴィンは心をだに部屋に殘すことなく（どこにその手立てがあったろう？
なすすべもなくそれは掻き消えざるを得なかったのだ）海に行った――近くの。
君も知る。
ホテルを出てまっすぐにあるけばそこに否応も無く海は存在するのだ（海に、私たちはなんらかの特権的な意味など与えて居なかったことなど言うまでもない。
海が故郷だと？
まさか。
海が美しいと？
まさか。
穢い、汚濁の、臭気を纏う生きられない鹽のかたまり。

へばりつく汚水のさざなみ立ち。
唯むごたらしい、）蘭はひとりで残された。
海に人は群れた。
観光客。
外国から来た。
何を求めて？
日のひかりはそそぐ。
波はきらめく。
白濁。
ひかりの。
そして青の暗示。
空は青いだろう。
それが我々に何をしでかし獲るだろう？
阿南の光が周囲に瞬いた。
瞿曇は沈黙した。
ヴィンは息遣った。
まるでいまだに彼等が、まさにそこで生きるかのように（事実、我々は生きていた）清雅は故意にヴィンに身を預けた。何人か、人の眼は私の代わりに彼等を羞じた。
うつくしい肉体を彼等の眼に曝し、そして触れ合う私たちを、清雅とヴィンの爲に羞じたのだった。
騒音。
波が複数の音響を立てた。
遠くに魚の群れがその身をくねらせたのだった。
波にその動きは痕跡をさえのこさなかった。
地表は熱を帯ていた。
部屋にかえると蘭はひとりで、そして我々がかつてここに存在してゐたこと自体忘れていた。
わたしとヴィンは共にシャワールームで汐を流した。
十六日。
・序ノ一
眞夜羽が昨日に同じ曇る空の白濁を見上げようとしなかった時に。
姉に取り残されて窓際に立ち尽くし、——已に見慣れたろう？
もう君は...
ほてるの７階から（東向きだ。故、その午前、十時前だっただろう...空は傾斜した光を彼女の表前面をなぶるのだった。
そよとも、光はそよともその縛った髪のおくれ毛の一本だに、そよがせもせずに）見た。
蘭は。
彼女が海を見ているのは知っていた（此処になにも象徴はないのだ。
海に。
海とはすでに破棄された残存物にすぎない。

故、むしろあなたは降る雨にこそなんらかの意味をもとめるべきだったろう。尤も、ここに雨は存在しなかったのだ...
雨は。
そこにも。わたしの心の中にだにも)。
不意に振り向いて蘭は云った。
なんで？
清雅（返り見た蘭の縛られた髪の束が派手にその肩に揺れたのを見たのだった）
なんで、來たの？
清雅は云、——なんでって？（我々はあれから一度も、指さきだにも触れ合いはしていなかった）
なにしに、ここに來たの？
清雅。あなたの目の前に？
なにがしたいの？
清雅。あなたに？
どこへ、連れてくの？...と。蘭は云った。それは奇麗な発音の日本語だった。わたしは彼女がかの東の（ここからは東東北である）島に残存するそれを話していたこと自体わたしは気付かなかったのだった。
ただそれは彼女の言語だった。
言語を侮辱したに似て、彼女はみずからの言葉を話している、そう私には意識されない儘に理解されていた。（私は言った、...日本へ、行くっていったね？
蘭は応えた。
答えもせずに、ただ、頷いたのだ。
彼女の心がすでに答えていたからだ）そうです。と。
わたしがそう云ったのは事実。
あなたもしってるでしょ？（於是、私はみていた。反対側、背の向こうに陽炎のかたちが這うのを。
壁にへばりついて。
それはいまは亡き兵士の陽炎だった。
どこで死んだのか。それは知らない。彼はベトナムの、現地の人間ではない。アメリカ人なのか。乃至、韓国人？ わたしには判らない。彼自身がすでに、それを記憶するというのとは別の形で、忘れない儘にわたしの向こうに日差しを見ていたからである。）なにを？——と。
わたしはささやく。
蘭は口をとざした侭だった。
そして、ようやく上目にわたしを見た（彼女は振り返ってからこのかた、じっと自分の足元に目を伏せていたのである）。
蘭がまばたく。
わたしは瞬かなかった。
彼女は逆光のなかにゐた。
逆光は彼女をくらませもしなかった。

ただ、その形を際立たせるのだった（ここに神秘はなにもないもない。
なにも。
一切。
ただ赤裸々だったのである）。
蘭は私を見詰め、そして心は凝視の中に顯らかにひたすらな沈黙のなかに存在した。その口（唇。上は薄く、あまりに薄く、故、下の唇のみが肉付いて見得る...）はあきらかに何かを言いだしかけた形を作った。
息づかうように。
その口がなにかを言いかけていることは知っている。
蘭自身さえも（彼女はあきらかに知っていた）。
言葉は發されなかった。
彼女は總て、骨ごと溶けくずれるように、そして笑ったのだった。
陽炎の散らした昏い飛沫が舞った。
壁に光は這いのぼり、舐めるようにやわらかくひかり、そして何をもみいださいままにみずからひかる。
私はただどうしようもない孤独を感じた（その孤独感が錯覚に過ぎないことはよくわかっていた）。
わたしは彼女を抱いてやった。
それ以外に蘭にしてやれることはなかったのである。
午後、夕方、眞夜羽が雲を切り裂き晴れ上がり始めた空に太陽の存在を二日ぶりに想いだした時、即ちあなたがひとり交差点で雨が降り始める事を案じもしたその瞬間にも、部屋に蘭を迎えに来たタオはそのひは歸ろうとはしなかった。
金曜日だから？ 慥かに彼女の明日が休日であることをわたしはそれとなくに察した。
ベッドの上、私にすがるようにじゃれついて彼女は甘え、蘭は必ずしも厭うでもなかった。壁の窓ぎわに身をしまいこむようにして立ち、東の窓に日没は見えないのだった。
夕食は三人で。ダナン市の空港の近くで。
後、蘭の寢息をたてるベッドの左側のその反対側にタオは私の素肌をその素肌に感じた。
ただ、肌をだけ彼女は求めたのだった（どうすればいい？
俺の心はただ切実に俺自身の不在を歎くのだ...）。
十七日。
朝。最初に起きたのはタオ。わたしが起きた時、肌をさらしまま私に覆いかぶさって、そして私を見詰めていた。子供をうでに抱くように。起きた蘭は姉にだけ笑いかけた。
彼女はすでに姉の心の内も知っていたのだ。わたしにはそう想えた。
蘭がシャワーをあびに入った時、わたしは（響き合え）耳に獸の声が重なった鳴り、（なぜ雨が真横にふらないのかをはだれも考えたことがなかった）それが階の下の朝のバイクのラッシュのエンジン音のつらなりにかすかな一致をみせるのを聞いていた。
タオが云った。蘭、どう？
蘭？
蘭、どう？（タオの髪の毛が匂った。わたしは彼女の肌の温度が已に存在してゐたことに、おもむろにふたたび気付いたのだった）

蘭？
いうこと聞く？
蘭？. . . なにも。
聞かないの？
なにも云わない。だから、なにも聞かない（タオの立てたわらい聲を聞いた）。
蘭、ね。——と。タオはささやくように云うのだった。私を見詰め（みとれさえしながら？）鼻で息遣い、唇はやわらかく開いたままで。「たぶん、岐ヤ宇さんの事が好きだよ」
そう？
「好きじゃないけどね、. . . けど」
なに？
「興味あるよ。好きなんだよ」
そう
「した？」
何を？
「好きになるような、好きになったらすること。そういうこと。した？」
した。
私がそう行ったとき、タオはただ眼差しを一度ゆらして、その一瞬のあとに（光はなおもふりそそいだだろう
外の風の中に飛ぶ
なすすべもない花粉のひとつぶにも）息でだけ笑った。「いつ？」
知りたい？
「知りたくない」
なら謂わない。
「そっか」
焼いた？
「そうでもない。まあまあ」私はタオを抱いた。
蘭が濡れた髪の儘で、それを私の使ったあとの濡れたバスタオルで吹き取りながら、何をいうでもなく見ていることは知っていた。タオも。氣づかないふりをするでもなく蘭は見下ろす眼差しに、私とタオを確認していた。
窓からは朝日がいつものように差し込むのだった。
その先に、海は白濁のきらめきを散乱さす。
わたしはそれをは見なかった。
タオの私たちをみる眼差しが、倦んで踵さえかえせばそこに拡がる光の散在のあることだけ、顯らかに知っていたのだった。
終わった時に、軈て目を開けたタオが云った。
蘭に、. . . タオル取って。
と。
投げたタオルに、タオは拭った。見られちゃったね。
そう日本語で、タオは蘭に言った。
仕方ないね。

蘭はなにも云わなかった。
蘭は口を開いた。
そして、聲なく笑った。
彼女は笑う音声すら、忘却していた。
その日タオは終に衣服を身に纏うことないままに戯れた。
部屋から出ることもなく。稀にだけベッドから立ち上がる。
蘭はわたしたちに三度の食事を買ってきた。
十八日。
眞夜羽は二日後に鳴り響く雷の音など想うことも無く、白濁のそらのしたに白濁する宮島に四方の海をみたのだった。
・序ノ二
タオが蘭を折檻した。
早朝に。
蘭がバン・ミーというホットドック風のパンのその具材を床の上に墜としたのだった。
その時に。
振り向き、それを確認した瞬間にはタオは蘭を殴っていた。拳で。
蘭の足が具材を（——レタスを）踏んだ。
その触感を思った（彼女は、...そしてタオも）。
だれにも気づかれもしなかっただろう（その触感は）。
蘭は抗わなかった。
泣くでもなく。
タオを正面に見た（パンを両手につかんだままに）。掃除しろ、と。
タンは命じた（ベトナム語で）。蘭は一瞬理解できなかったのだった（言語障害ではない。ざわめく心がそれどころではなかったのだ。冷淡な表情のむこうで）階下の植栽に咲いた桃色に黄色の花を思った（わたしは。誰も...タオも、蘭も、それを思いはしないのだった）。
軈てタオはわたしにしがみつくように、そしてベッドの上で（皮膚の触感。
覆いつくす、人の河皮、温度、その向こうの贅肉と骨格）撫であげられたタオの髪の毛が私の手のひらに触感をのこした。
匂った。
髪も。
タオの肌も。
息の。
乃至、中を舞うちいさな、見得ない唾液の飛沫の匂い？
日が斜めにさす。
夜の更けてからタオは蘭をつれて還った。
帰り際に二日ぶりに彼女は衣類を見に纏うたのだった。ただ一度だけしかわたしに抱かれもせずに（彼女を侮辱してはいない。
タオは慥かに清雅に愛されていたのである）。
十九日。

朝、タオは蘭を連れてきた（意外な気がした。意外でもなんでもない気もした。雪はふらず、そして日差しは木の葉の上に、軈て蛾になる毛虫をなぶった）。
タオ。
ささやく。
——（早口に、声をひそめるように、蘭にはかくしもせずに）このこ、悪いこ。
誰？
——蘭。
と。
鼻に日差し。タオの。（彼女はすでにしげられせただろう。その小腸に柔毛を）
斜めに。（彼女が二十四度も食った猪の）半分だけ。
きらめく。
何が？
あわい、あわい、あわい...ひかり。
なにが？
産毛が？
いや。...ひふそのものが。
霑いの記憶をさえ伴って。
霑れもせずに。
タオ。
ささやく。
——（上目に私を見...いつも。
あなたは俺だけを見るね？ そういったタオはわらっただろうか？
振り向きざまに出も？）いうこと、ぜんぜんきかないの。
そう？
ゆらげ。
木の葉、花、足の下にさく地表のブーゲンビリア。その紫の花（——即ち色づいた葉）までも。
ゆらげ。風に、そして聞くのだった。
タオは。
わたしの聲を。故に。
タオ。
ささやく。
——（まばたき、）しかって。
俺？ と、わたしは云った。
タオの爲だけに笑み乍ら。
——俺？
——しかって。
——なんで？
——悪い子。いうこときかなくて、
——なにしたの

——悪いの。...と。
タオは謂って、そして私の見つめる眼差しに、その一瞬に笑んだ。ささやく「じゃ、行ってくるね」
わるいことしたら、お尻たたいてね。
「行ってくるね」
タオがささやく。
蘭と私は見ていた。
タオがささやく。
それを。
・序ノ三
夢を見た（是は蘭を胸の上に抱いてやりながら転寝に墜ちたとも気付かずに開いた眼差しが見た夢である）...夢を。
知りたい？（あなたは知るすべもないもない。譬えもっとも正確にわたしが詞以てなぞったにしても。その香にっだにもふれずに指は、...指先は。嘗て一だに愛した百合の花の香にすらふれられなかった是は或は悲劇だったか？）
土の中から顔を引き出すと（匂う土。
土の匂うその匂いの玉に、懐かしさなど最早無かった。不愉快でさえなかった。寧ろ。
はかないさざめき。
むしろ敢えて透明な水の薫る、そんな匂いだったのだから）死んだ麗人が血まみれの儘に自分の右手を咥えていた（あの悲劇的な死。
だれが焚きつけたのだろう？ 私たちが二十代の半ばを終えた 90 年代の末に。
いまだに存在した六本木の旧防衛庁の廃墟の櫻の花を見下ろしながら。
そのビルの屋上に。
腹を切って見せる時代錯誤を曝した)。覚えてる？ 麗人。
赤坂の帰化中国人に踊らされたようなものだった。片足の王。まちがいなく偽名の王黄　。王の作らせた右翼団体で詰め腹を切らされた。——行動主義ってこんなものなの？死んだ日本人、みんな浮かばれないよ。王黄　は君をも誘惑しようとしたね？
——あなた、百姓の子供。わたし、中国人。でも、...ね？ 死ぬときは皇道の侍。天子様の侍だからね。
片足義足偽名の黄　は（とはいえ wáng、huáng、yng、おかしくはないのだった。於宇於宇於宇をあやしんだ、それは我々ジャップの脳内の線虫のせいだったに違いない）微笑乍ら云った（いつも絶やさないやさしい、その。わたしたちを庇護した彼の）
——死ぬなら今よ。生きる爲に死ぬのよ。あんた、死は此の國の侍の最後のイノチよ。）
と。大友麗人が右手を咥えてわたしを見ているので（周囲の腐臭は黄泉の？
まさか。
黄泉の？
本当に？）わたしは笑いながら言った（快活に...）間違えるなよ。
と。わたしは麗人の爲だけに言った。「お前が無くしたのははらわただろう？
お前、右腕も左腕も亡くしてないよ」
憔かに、左腕さえもなかった。両腕も兩足もなくて、空中に突き刺された麗人は汗のし

ぶきをちらしたように血の薄い紫の色を玉散らせ続けるのだった。——間違えるなよ。
私はかれの耳にささやく
——おまえがからっぽなのは、腹の中身だけだぜ。
瞬きもしない。
麗人は。何故？
眼窩などどこにも開いていないから？ と。蘭の頭をなぜた。
ふいに蘭が頭をもたげたので私はその嗅ぎ取られなかった髪の毛の匂いを思った。
わたしの鼻に終に触れなかった空気は夥しくわたしの寸前でその香を含んでいたはずだった。
蘭はわたしに口づけた。
いきなりに。
だから、私は直感した。
蘭はまさに私を愛していた。
私は目を開いた（わたしは已に、蘭が死にかけているに違いないことを確信していた。それは最早免れ得ない事実だったのである）。
私は彼女の唇をだけ愛した。
心に（目を見開いたままに）彼女の肌の褐色が斜めの日差しに複雑な陰影を這わせるのを思った（それは冒瀆だったろうか？
そうではないだろう？
わたしは彼女のまぶたの震えるのをみるのだった。
それ、瞼の、まばらに濃い睫毛が。
こすれあうように。お互いに。なじるように、こすれあうように）。私は見ていた。彼女を（蘭を）つれだした山の端の平野に緑の色は茂った。
私は目を逸らさなかった。
蘭はいきなりに膝間付いた。
わたしに背を向けた儘に。
故にわたしはようやくに彼女に（蘭に）追いついたのだった。
肩を引き、返り見させた蘭は口いっぱいに紫の地に金色を這い上るように散らした蝶をおびただしく口に咀嚼していた（あなたなら叫んだはずだ）。
わたしは微笑んだ。
言葉も無くに（おそらくは愛、すくなくとも彼女を哀しみ、共感さえ（何に？）していたからだろう）。
蘭のくちから咀嚼される蝶に垂れる躰液が匂った。
二十日。
あなたはその日、同じように曇った空一面の白濁を見たのだ。瞿曇は嘆いたか？ 地の下で？
眞夜羽とおなじように、あなたは見上げた。
白濁を。——なぜ？
あなたは何故空を見上げた。
其の上の上空の青の一色を思ったのか？ タオを抱いた。

朝、蘭を連れて来た時に。
タオは戯れの拒絶を見せながらささやく——遅刻する、と。
甘え。
故意にちいさく、噛みしめるように甘え。
　五月またみどりはふかく　見よ
　　かなたに白き鳥のとぶあり
思う。この常夏の熱帯に？
わたしはタオの肌に触れた。皮膚が脂肪の温度を讃えた。
　五月またみどりはふかく　見よ
　　かなたに白き鳥のとぶあり
詩人の眼に其の日、雨はよぎらなかったのか。
だから、鳥は濡れもしなかったのか。
　ゆきのうちに春はきにけりうくひすの
　　こほれるなみた今やとくらむ
唾液の霑う温度を感じた。
わたしの唇が。
私の唇だけが。わたしは目をかすかに閉じた。タオは已に目を閉じていた。壁ぎわに、タオがその目には捕えて居なかった蘭に言うのを聞いた。見ないで、と。
私の爲に日本語で、タオは蘭に言った。
タオが恥じらい、困惑した微笑に充足を曝しながら立ち去ったあとで、私は窓際の蘭の後ろ姿に言った。
「話せ」
静かに、そして決然と、わたしは命じたのである（なぜ？
なぜ其の時に空はまるで恩寵のように透き通って、かつ濃く、いやがうえにも濃く、青み渉るのか？）。「何を？」
返り見た蘭は云った。
わたしはそこに、蘭があいかわらずにみずからの顔を以てあったことに、前触れの無い動揺を感じたのだった。「言って」と。
蘭は云った。
「言って」
何を？
「何を、話してほしい？...言って」
と。
其の時に蘭の眼に零れそうなほどにたまった涙の存在に気付いたのだった。清雅は。
ひとりで。
それ、震える雫のこまかなきらめきの綺羅羅に。
二十一日。
ヴィンが来た。
言った——心配してた（と同時に彼は蘭にかれの母国語で数語語りかけたのだった。わたしには聞こえなかった。聞き取れなかった。蘭はかれに背を向けたまま答えもせず

に...できないのだ。
はなせないから。抑々、それが人の言葉で、人が言葉を話すことさえ彼女は覚えてゐたのか？
まさにその時に)。
連絡、返さないから。...と。
ヴィンはそういった（其の時に、蘭はわたしの膝の上の頭に、軽く目を閉じて安らいでいたので)。わたしは蘭の頭を撫ぜようとする。
私はヴィンだけを見詰めていた。
彼は云った。...最近、外に出てないね（是は清雅にいったのだ。何故ならわたしはいつでも彼と共にいたからである)。
どうしたの？...と彼がいうので、「飽きたんだよ」
「飽きた？...ベトナム？...ダナン？（と慌てて彼が云った時、ヴィンはまさにわたしが此の國、...彼の辛うじて手の届く範囲から逃げ出そうと画策してゐることを案じ、そして憂い、歎き、それらの感情を自分自身さえ隠し通したのである)」
わたしは聲を立てて笑い（彼は、故にその空気の震える色合いをあびた）空に鳥が滑走した事実を、清雅もヴィンも決して見ようとはしなかった。
皮膚の上に細菌の一つが分裂した。
覺醒のあたらしき伊能智。乃至は、ふるびたままのイ乃血の二重化（——記憶は）？
プラナリアは何を、いかに、どこに記憶したのか。
「この世界に」
ややあってヴィンは笑った。祝福を。
瞿曇よ。
王よ。
決してあなたが作らなかった世界のすべてに。
その指の触れもしなかった世界の断片の群れ共に。
王瞿曇よ、...憩え。
ヴィンはわたしを口にした。
蘭はベッドの端で目を伏せた。
焼いてる、と。
ヴィンが目配せに伝えた。
聲もなく彼は笑っていた。
光が舞っていた（いつでも...いつでも...綺羅らいで。
いつでも)。翳りがわたしの背中に休む。
血にまみれた儘、流す血をだに考慮せず。なぜ？
わたしは思う（蘭に。...蘭にだけ...蘭に)。なぜ、歎くふりをするか。
目を伏せて。
人の型をしただけのはりぼてのくせに？（ひとは已に死滅していた。それが地に生まれるはるか前に既に）
二十二日。
曇り空のしたにまで、汗ばむ君の肌を思う。その白い胸を...久村王に。

迎えに来たタオの眼がわななく（——瞼が)。何故？
手を引こうとしたその姉の手を叩き落としたのだった。さしのべられたささやかな虚空に。
私は笑んだ（なぜ？...）陽炎が壁に血を水平に伸ばした。死者ども（結局は不滅の、滅びさえし得ない死者ども)。思うにすべては私が語っているのだろう。その腐った燃える目で見開いたままの眼差しの見えたまにまに。かげろひ、翳りの目のうちに。それ、わたしは翳ろい色も無く天上に張り付いて臓器を垂らしていたのだから。
タオはもう一度手を差し伸べるのだった。蘭の鼻のさきに（暴力的に——なにも。
なにもこわれはしない。なにも。
なにも、ふれられさえしない)。蘭は見つめた。
憎みもしないで。ただ、姉を見詰めて。
蘭は見つめた。
タオの指先が蘭の鼻先に痙攣する似た一瞬の動きを曝した時に、「馬鹿！」と。
私の爲にタオは言った。蘭に。蘭がふたたびその指をはねのけたから。
タオは拳で蘭の側頭を殴った。身はくねるのだった。倒れ伏しもしなままに。
玉散る水滴の姿を幻見た（わたしは。ひとりで。むらがる翳りの燃える目のうちに)。蘭が顔をあげた。タオの掌が押しつぶすように、それを討った。
首を變なほうに曲げて、蘭は息づいた。
タオの唇がわななないた。
わたしは微笑みながら、自分の眉にゆびで触れた。
眉毛は密集した。
思い出したように腰からその場にしゃがみ込む蘭を、タオは蹴りまわし続けていた。タオの肉が他人事のようにそれぞれにそれぞれのふるえを見せて窓の向こうのその一角は空の青くらむ透明なくらさを讃えた。
鳥は見上げたのか？
電線の上で。
はらからと群がり、共にでも...それ。鳩は。
折檻の手を（息をあららげながら阿羅羅ゲ阿羅羅羅ゲ阿羅羅羅羅羅羅ゲし乍ラ）休めたときに（肩の上下。胸の。その上下。鳩尾。その。腹部、その。上下)、顔をあげた（蘭は、——ずっと、彼女は顔をあげて殴り蹴るタオを見詰めていたのだった)。
目をとじもせずに？
手のひらに咬みついた眼球を私は指にはじき落とした。
蘭は口を広げた。
タオがくちを開いた。——何よ！ と。おそらくそれに類する言葉を彼女はベトナム語で行ったのだった（判らない。わたしは彼女たちの言語を解さないから。故にこれは嘘偽りなく書きながらもあきらかに荒唐無稽な作り話にすぎない...）
——何！
蘭の開いた唇は、そもそも口を開いた自分自身を飲み込もうとしたかにさえ、——何よ！
タオが叫ぶ。
——何？...莫迦！ 何よ！

蘭はなにか訴えようとしていたのだった。
兩眼を開け、且つはあけ広げた口をわななかせ、膝間付いたままに背筋をのばしきり、筋肉をかすかに痙攣させ——うるさい！
タオが叫んだ。
——だまれ！ うるさい！（わたしにベトナム語は判らない。まったく、わたしには判らないのである）蘭はそのままに後ろ向きに大股を広げて転がり、腹をふるわせながら目を見開いたまま泣いた。
聲もなく。顔を多いだにせずに。蟹のように。
澤の。
蟹のように。
兩の手。ないし足、それらを。
澤の。
さわやかな澤の。
風はふくだろうか。
澤に。
どこかの。
だれかの。
澤に。
いろもなく。
風は（蘭は言葉が話せない。乃至、詞の存在自体にふれてゐない。
無言に蟹を擬態した蘭にわたしは顯らかに知ったのだった。
わたしたちのすでに知るわたしたちの沉默を？）。
二十三日。
午前の雨に濡れたあなたを想う。親愛なる玖牟良王よ。
眞夜羽は濡れなかった。眠りかけの耳だけが降り出した雨の音を聞いたのだ。
朝、ヴィンが（朝、私は雪にふれる夢を見たのだった。
雪。それ、梅の枝？...ほそい枝の蕾みに。
積もれ、雪よ。わたしが伸ばした指先が数秒後あなたにふれて仕舞うように...）來た。
曰く、——今日もいるの？
だれ？
——その子。
わたしは笑っていただろう（ヴィンの眼に微笑みは触れたのだろうか？ 指が？
指が或は雪に触れかけたように）。その時に。
——いつまでいるの？
私は彼を振り返り見て、そして云う。
——めずらしい。
——なにが？
——はじめてじゃない？
——なに？
——連絡しないで（...なにも、れんらく...（笑い、かすかに）しないで、（笑い）...）來

るの。
と。
ヴィンはその聲を聞いていた。黒目の瞳孔を開きかけながら（匂う？
なぜ。
雪になぜ花がにおう？
花、それ。白百合の、悲惨な匂いが）と、ささやく。
——だって、あしたはあのデブが來るでしょ？
わたしは聲を立てて笑った。
——嫌いなの？
——あの子が嫌いなの。俺を。あの子が。...
赦してなんだよ、とヴィンは謂って、「俺が清雅と幸せになるの。俺たちの方が先だったのに。俺のほうが早かったでしょう？」壁にひっかく。それは翳りの爪。
壁に。
「あたま、變」ヴィンは謂って笑った。
蘭は顎をひいてゐた。うつむいていた。且つ笑んでいた。可愛らしく得た。私の眼に。一瞬の一瞥の中に。そして知性もなにもない笑みに私は思うのだった（ひとりで。
蘭に隠したつもりもなくに）。
——嫌いなの？
それは私の聲
——なに？
是はヴィンの聲。故、ヴィンはささやく。「なにが？」
「あのデブ。君の、きらない子（ママ）」
「あの人？」
「お前、嫌いなの？」
「好きじゃないよ」
ヴィンが笑った。
「殺しちゃえば？」
私は云った。
「いいね。」
ヴィンが云った。
「あんなひと、いなくていいね」
ヴィンが云った。
「必要ないからね。いなくていいね」
ヴィンが云った。
・序ノ四
私とヴィン、ヴィンと清雅、清雅と蘭、蘭とヴィン、蘭は私とこの日海を見に行ったのだった（午前中だ。ヴィンが云ったのだった。
——海でも行こうよ
——また？
——海、いいよ。海（...と、蘭に）好き？（ささやくように云う、口をおおきくひらき、

聲ははりあげないままに、あくまでも）好き？（ささやくように）海。
好き？...とヴィンが云った時、蘭は今更にそこに誰がいるのか疑うような目でヴィンを（落ちる。
そして光の束は。
地ノ下の微生物の分化した瞬間、鳥の羽。
羽の上——羽毛の。
...に、さえも）見た。
——好きでしょ。
ヴィンは云った。
——好きだよね。
ヴィンは云った。
——好きだよ。
振り返ってわたしにそういったヴィンの髪の毛を逆光は白濁に隈取るのだった。)。
風がかすかにだけ吹く。
吹くというよりは撫ぜるのだった。
——ほんとに話せないね。海岸で私とだけ戯れた後（蘭は水内際に立って見ていた。
さまざまなものを。波。
乃至雲、空。音響。
人の形。
音響...背後の。頭の上の。
それ。
鳥の音響。
風？
色の無い、...色彩の無いものを、我々は見ようとしなかった）云った。
ヴィンは、——話さないの？
それは蘭のことだった。
——話せないの？
——聞いてみたら？
ヴィンが笑った（色の有においてしか見るの有を求め得ない我々は深刻な狂気の中に入る。
空は実態である。青の色彩をさらすからだ。ならば青にふれよ。
ガラスは不在である。色彩が存在してゐ無いからだ。我々はガラスを苦も無く通り過ぎるだろう。
狂気が現実として正しくないもののなかにあることであると定義するならば、我々は目をくりぬくりぬかなければならない。
とはいえ、自傷は狂気にすぎまい。故に）こぼれんばかりに。
邪気も無くにヴィンは笑った。
ヴィンが返り見れば蘭はヴィンを見た。その時に蘭の眼差しに空が砕けて破片を散らしたに違いなかった（轟音と共に？）、踵を返した蘭が駆けだすのを私たちを見た。身をもぎるように、ヴィンは私のかたわらから走り出して聲を立てて笑いながら蘭を追った。

それがまさに蘭を混乱させたにちがいなかった（人の眼にそれは虐待にみえたか？
戯れに？
犯罪に？
なにに？...何に見えたろう？ その時に）走る蘭の髪が揺れた。
私は笑み乍ら（誰に？
誰の爲に？）彼等の跡を歩いて追う。ヴィンは駆ける。蘭は砂に足を絡めながら走る（——のたうつように？）。午前の深い、高日の光はさす（われわれが太陽の表皮に觸れることなど、結局は一度もないだろう）海岸を無理やりの終了をそこに見せた湾岸道路の車線、その段差を駈け上った（蘭が。
花のように今ちいさく見えた。蘭が。
褐色の花。その色彩よ）。ヴィンがその背後のすれすれに駈け上り、車道に躍り出た時に不意にヴィンは立ち止まった。
アスファルトは高熱だったはずだ。
その、ヴィンの裸足は。不意に左を省みようとしたときに、貨物のトラックがブレーキもなしに彼を引きつぶした。
遅れてクラクションをならし、さらに遅れて踏まれたブレーキがタイヤに絡んだヴィンを叩き潰したに違いなかった（私は聞いていた。
耳に。
その音を。——心のなかにだけ）。
私は駆け寄った。人だかりはすでに出來上がっていた。人だかりをかき分ける気にはなれなかった。その周囲を廻り、彼等の背中の向こうの正面に彼等の眼だけが見ている筈の肉体の残酷を思った。
生きているかもしれないと思った。
いまだ、かろうじて？
最後の七つの呼吸の二つ目までも追えて？
思う。——今すぐに死ね。と。未だに生きているのならば。
苦痛さえも感じられない感覚器の乱反射の中に、脳はすでに死んでいた筈だった。背骨も、眼球も顎も肘も。
裸足の足にアスファルトの熱が、そして人ごみを一周することもなく離れ罹ったときに、噛みつかれたような悲しみが私を襲った。わたしは泣き崩れそうだった。
左手の先に蘭が立っていた。三車線三車線のその真ん中のココナッツの並木の影の下に。私の眼は清雅がそれを見つめ続けている事には気づいていた（空は只管に悲しく、明るく、ふりそそぐように悲しかった）。
空気中に痛ましい匂いが張った。
蘭は表情もなにもなくて、ただ私を素の顔で見ていた。殺した、と。
思った。蘭は彼を殺した、と、憎しみも無く彼女をうばうように。
私は蘭をつれてホテルに駈け戻った。
・序ノ五
ホテルの部屋の中に、すでにヴィンの記憶は存在してゐなかった。
大気中のほこりの薄く舞うのが綺羅羅を曝した。

わたしは体を洗った。
鹽を。
蘭の傍らに座った（下の騒がしさは... 垂直下の 300 メートルほど南の騒がしさは、当然としてここまで傳わっては来ないのだった。っ駐車場にはヴィンの忘れられたバイクがそのままになっている筈だった。
私はそれらをかんがえながらも蘭を見詰めながらにもはやヴィンの存在だに忘れかけていた。
上空の風のむたながれる雲が部屋の中にまで翳りを落とし、且つは流れた）。
蘭の頭を撫でた。
蘭は云った。
「日本へ行く。」
ささやくように、——歸るの、と。蘭は、
「海の中に...」
と。... あるじゃん？
「あるよ...」
——ね？
と、蘭は、... 燃えるお城。
「あれ...」ささやく。蘭が、「あれ、... さ」
燃える、海の中の城。
——日本に歸る... と。
ささやく蘭の聲をだけ、私は聞いていた。
夢を見た（是はその後部屋に来たタオを抱いた後の話だ。タオが転寝をはじめ、消された照明の中に蘭は窓の外を見ていた。タオはは背後で私と姉が何をして居るのかさえ認識してはいないに違いなく思われた）。蘭の口に私は右腕を突っ込んでいた。
背後に血まみれの鬼たち（... と私はそれを呼んだ。
彎曲を描いた、細い糸の輪が生きながら伸縮し、その度に血と匂いのある精気をまき散らしていたのだった）が聲を上げ続けた。
その聲に意味など無いのだった。
犬の吼え聲よりもむしろ雨の音や火山の響かせた轟音に親しかったはずだ。
わたしは瞬くことさえもわすれていた。
蘭のめに黒目はなかった。白目さえも。
三つ空いた透明な向こう側に、彼女はさまざまな風景を私にだけ見せている筈だった。
蘭の喉の奥、体内には生き物のやわらかな温度在った。
私の指には鐵の爪が生えていたから、それらが掻き毟るたびに蘭は内側から崩壊してるにちがいなかった。
とりかえしのつかないことをしている実感はたしかに私にはあった。
もはや蘭はだいなしだった。
いきものとして台無しだった。
この手を引き抜けば内側から蘭が崩壊するのは目に見えていた。
はたして、蘭に価値など在るだろうか？

わたしは思った。
私が自分の右腕一本を犠牲にし（なぜなら、その体内は紅蓮の炎を燃え上がらせる灼熱だったからだ。私の右腕はもはや苦痛にのたうちまわっているに違い無かった)、さらに彼女そのものを犠牲にしてまで彼女をほじくりかえす価値など彼女にないのだった。
私はもはや嘆いていた。
引き抜かれた右腕は焼けただれるどころか、焰を移して音もなく燃え上がり続けるに違いなかった。
鳥の口の中の匂いを嗅いでいた。
鷲の。
鳥の口の中の匂いを嗅いでいた。其の時タオが振り向き見た。
故、わたしはベッドで彼女を見つめ続けていたことに気付いた。
まどの向こうは暗かった。
故、部屋の中の薄明りのせいで背後の黑はうすくだけ私ごと蘭の背中を移した。
うすく。
私はなにも語り掛けなかった。
タオはなにも離さなかった。
彼女は明らかに其の時言葉に触れて居なかった。
故、詞の無いある別種の生き物のとしてその顯らかな目で私を捉え、そして顯らかに認識していた。
タオだ出てきて、私に覆いかぶさった。ささやく——見られたくない？
私に言った。タオは、——蘭に。
「見られたくない？」言ったタオの聲を「いいよ」聞き取る前に、「もう...」タオは「...ね」言葉を重ねて、故に
——もう隠す事なんかないよ
わたしは波紋を見るように、その音声の連鎖を聞いた。
「何もない...」
タオは
「いいよ」
鼻の奥に鼻汁を噛むような声で——見ていいよ。
ささやく「何も、...」と。
まるで私にささやかけたかにも似て。
二十四日
眞夜羽はその朝、一瞬だけ曇り空に舞い落ちた一滴の雨の雫を感じた。
その頬に。
あなたは？...ともかくも。目を覚ました。
・破
私は。
まさに自分が眠っていたことを自覚した。わたしにからみつくタオの素肌の温度があった。
タオは眠ったままだった。

寝息を聞く。右手の先に横たわっていた蘭もすでに目を開けていた。
私が彼女に気付いて、首を曲げた瞬間に、その開いた目が我に返ったのを見た。
息を吹き返したかにも蘭は瞬き、そして頭をつめて上半身をのけぞらせた。
体躯がきれいな彎曲を描いた。
顔を私に向けた。
蘭にいまだ顔が存在し、更にめがあり、まして黒めだにもあったことがわたしに新鮮なおどろきを与えた。
蘭のあたらしい一面を見出したが気がしたのだ。
阿のかたちに、蘭はその口を広げた。
舌を口蓋の奥に張り付けた儘に。
口を開いた。
骨格を損傷しそうなほどにも。あと数日後には、ヴィンの陽炎が壁を這うだろうと私はひとりそう確信した。
・急
わたしはその唇に触れた。
指をのばして。
やわらかい。
なぞる。

文書５-　前半

文書５- 前半

文書５（清雅文書Ｂ）
片岡比羽犁から北村恒忠氏宛て。メールに添付。
メール本文以下の如。
　お疲れ様です。
　お久しぶりです。例の香香美清雅からの「報告書」のまとめです。
　読んでいただければ、お見せするのに躊躇した理由もわかっていただけるかと思います。
　原文はいつものようにメールで。
　本人は近日日本に帰国希望のようです。
　帰国時面会できるよう調整しようと思っています。
　ただ、あまり期待しないでください。わがままで、きまぐれなので...
　帰国理由は友人に会わなければならないとか。
　ご確認ください。
以上。
添付ファイル以下の如。
（清雅文書Ｂ）
８月12日。
早朝、夢を見た。あなたの夢を。
ひさしぶりの連絡、驚かないで（怠慢じゃない...できなかった。何故？ わからない...）
夢で、あなたは駅にあなたのやわらかな髪を払った。何故？ かすかに雨の...霧のような雨、それがあなたの髪に飛沫を散らせたから。
あなたはかすかに首筋と指先に水滴の冷たさを感じた――どう？
違う？
たぶんあってると思う。生々しかったから。
レ・チャン・タオという女性から連絡がありました。清楚なかわいらしい女性だ。三十前。日本への留学経験がある。日本へ行くと婚期までのびるようですね。日本人の病気が伝染して？ 日本語教師。
秘密にしたわけではない。念の爲。
話すべき程の関係もなかったから。それだけ。
タオは、待ち合わせたカフェで妹に逢ってください、という。そして、嫌じゃなかったら預かってほしいと。

何故？ とわたし。
曰く、彼女、両親親族と折り合いが悪いのですが（理由は聞かなかった。プライヴァシーでしょ？ 人のあやういところまで土足でふみこむ気にはなれない...)、妹を預からなければならなくなったらしいのです。
妹は（歳はとてもはなれている。十四歳...同じ母だとか。...あやしい？
わたしもそう思う。でも、わたしはなにも聞かなかった...理由は上に同じ）失語症らしいです。
６歳の時に言葉を失った、と。
だからまるでいまでも６歳のままなの、と（そんな失語症があるのでしょうか？ もっと違う、なにかの疾患なのだと思いました。その時から。尤も、これはあなたの専門であって、わたしには自分のことしかわかりません)。
心が痛みました。何故？
妹を語る時、タオさんはとてもやさしい眼差しをみせる。その、目の色が...
妹さんはサイゴンの病院にいたらしい。そこで問題を起こしたらしい。よって、もううちではあずかれない、と。
ただ、姉のほうも自分一人で食べてますから。誰の庇護があるわけでもなく。
タオさんには仕事がある。立派な仕事。人を育てる仕事。だから日中不在。妹をひとりにはさせられない。だから、お願い、と。
あなたの疑う心の動き、今、よくわかる。たぶん、彼女が（まったく親しいわけではなくとも）一番心をゆるしたのは私を置いてなかったのです。実は、彼女の気持ちには気づいて居る。
わたしは、ね。云わないけど。彼女も云わない。...だから。
わかるでしょう？
私はいいですよ、と答えた。ようするに、共感するところがあたのです。わたしもよくわかりますから。ひとりで生きてこなければならなかった人の気持ち。わたしもそうだから。
明日、つれてきます、という。
今日は大丈夫？
今日の夕方の飛行機で来るんです、と彼女。
そう、とわたし。
彼女は頑張って微笑んでる。わたしはただ、心が痛かった。
以上は午前。
午後、海に生きました。
カンバスもなし。スケッチブックなし。
海を見に、眼差しの中で、色彩を見極めに。
なんどトライしても終に見切ったと想えない。そんな軆たらくで水浴を描こうとするわたしは所詮、狂ってるんでしょうね。
悲しくなった。じっと見てると。
海岸を歩きながら。
切なくなった。

浪の音を聞いて。
ひきさかれるような、そんな...
汐の馨に。
でも、空しくはならないんだ。
なぜだろう？
夜は誰とも会いませんでした。
池田龜鑑という方（源氏の研究で有名な方）の戦前の本で伊勢物語を 50 冊近い本から校訂した本というのがある。
此の本はこうあの本はこうと異同の詳細がいちいち列挙されていて。
それを全部ばらして一冊一冊もとの形に直そうと思っています。
そんなことやって何の意味があるのか？
ありません。
これはたんなる趣味、それいじょうのもじゃない。（でも、比羽犁とわたしを同じ人間種だからって組み合わせて、人間種ってこうだよって。それ、おかしくない？ 本来比羽犁は比羽犁。清雅は清雅だよ。違う？）
本日は以上。
では。
８月 13 日。
あなたは今、時に遠く雷鳴を聞いているはず。
転寝もしないのに夢を見て、そしてあなたが目の前...わたしの腕の中に、そして震えて居ました。
どうしたの？
だってね...おそらがなるんだよ...まるで子供のようにそう言った。
なぜ、瞬いた瞬間にわれに返って仕舞ったろう？ 幼いあなたを失った気がした。
腕に温かみさえ感じています。
怖がらないで。決して、なにもあなたを傷付けはしないから。
あなたは、何によっても、誰によっても傷つけられなどしないから。...
午前。タオさんが妹を連れてきました。
昨日報告したけれど、お姉さんは色白で、ちょっとふっくらしたかた（一般的に女性はシャープな体型をよしとしすぎるわけです。結果、拒食症だのなんだのでしょう？ あなたも数知れず見て来た問題でしょうが、ちょっとぽっちゃりで一番女性らしいとおもうのです。源氏絵巻の女性も浮世絵もルノアールもレンブラントも、みんなすべからくゆたかでしょう？ ルーベンスまで至れば、あれは男の肉欲にすぎません...あれはダメ)。
一方、妹さんは灼けた褐色のあざやかな肌で（色黒という言葉の差別性を日本人はいつになったら認識するのでしょう？）瘠せた、鋭い感じ。昏い眼差しをして居ます...(たとえばアンナ・カリーナ。ヌーヴェルヴァーグの。それをもっと研ぎ澄ました感じの）
出生の疑いをわたしはいよいよ濃くしたわけですが...
なにも話さないから、まったく邪魔にならない。
反応はにぶい。
でも、ときどき笑います。あまりにも純粋な笑み。

狂人が狂人の世話を？ と（とはいえ、あなたも知るように私にとって狂人としてあるということは私からもあなたからも離れて謂わば自生する草の花に舞う蜂としてわたしを、時にはあなたをまでもみるということです）。あなたは笑うでしょう。わたしもおかしく感じる。
なりゆき上、しかたないでしょうそうおもいません？
夜はきのうと変わらず伊勢物語。
ひさしぶりにまとめて読みかえしているわけです。
しかも各段五十回づつね。
あんきしてしまいそうですね。
本日は以上。
では。
８月 14 日。
左の指に気を付けて。なぜなら今朝なみだをこぼすあなたを見たから。
日ざしがななめに差した（斜め、...60 度くらい？）。あなたは瞬くのだが、（そして涙などけはいさえないのだが、）わたしはあやぶむのです。その睫毛をあなたの涙がぬらしてしまうだろうと。
きょうは雨がふりそうだったんでしょう？ 違いますか？ 左のゆびに気をつけて。
いずれにせよ誰もが纔かの悪意もなく此の世界を悪意をもってしか見いださないいじょう、わたしはひとり悪意をもってこの世界をすなおに見い出してやろうと努力する者です。
あなたにとって今日が水曜日だったように、きせき的にわたしにとっても今日はすいよう日だった（是は大切なこと。あたりまえだと認識していることじたいに、なんとすさまじい希少性があるだろう？）。だから昨日とおなじくに（まったく違う日、まったく違う時間の中、全く違うじかんと空間の経験だったにかかわらず）午前、タオは蘭を（その褐色の少女をわたしは秘かにそう名付けたのでした）連れてきました。
ベトナム語で彼女は Lan、即ち中国語では蘭、故、日本語でも蘭です。
昨日、タオに耳打ちしました。
——名前は？
——誰の？
タオは斜めに顎を傾けながら尋ねた（わたしが妹の名を聞いたことに、彼女は妹への嫉妬を隠す一瞬にわたしを諫めた...）その時に、タオは、
——誰の？
口ごもるわたしに（タオの黒目に反射した様々なかたちの白濁となった朧な姿が見えていた）タオはささやいた。
——妹の？
わたしの唇は（喉さえ、その奥さえも）一瞬言葉というものの存在を忘れていた（つまり、其の時にわたしは蘭と同じ風景の中にいたに違いない）。聲を聞いた。
耳元に。
それは、タオの。
——ラン。

と。...タオはそう云って私にだけ微笑みかけた時に、私ははじめて褐色の少女の名前を知り、名づけさえし、タオもまた何度目かに知ったのでした。自分の傍らに沈黙する少女の名前を。
タオがいなくなった時に（彼女が私に残して云った心の、その思いの断片がいまだに匂う氣がした。
彼女は立ち去りたくなかったんですね。
わたしのそばにいたいから。そして、わたしの爲だけに微笑んでいたから、つまり、すまじい貪欲と傲慢そのものとして...）褐色の蘭が窓際に立っているのを見て居ました。
その背後に私は話しかけたのでした。
——何、見てるの？
蘭の向こうに、窓はひたすらに光るのでした。
——何が、見える？
光、と。まなざしはそう初めに認識し、やがてはそこに海の形を見るのでした。
——...ね？
形。...海の形。
——何が、見える？
形のなき物。ふれる事さえできない...いや、ふれはするのだが、つかめない、さわれないわけですね（いま、わたしは觸れるという言葉と触るということばに新しい繊細な意味を付与したのです)。さざ波み、いわば、動きと色彩でしかないもの。
その形、と。
私はその一瞬に気を失ってしまいそうになりました。
私があまりにも多くの錯乱の中にいることを、まさに私の網膜の表皮が、あるいは指先の皮膚そのもが容赦なく実感したのだから。
私は其の時に宇宙を感じたのでした。その昏い空間に停滞する青く、白く、茶色の塊りを所々に散らした惑星。その地表に蔓延る様々な生き物の内の、その一種の、そのまた一種の、そのうちの一人の小さな瞬間の（短い...と？。わたしにとってそれは時間的な短さではもはや無くて、物理的な極小を意味した...）錯乱。
日常的な錯乱。
それがどれほど巨大な錯乱であることか！
わかりますか？
宇宙の総てを飲み込んで倦むことなく飽きもしない、すさまじく巨大な錯乱。
わたしが目舞い、しかも目を（鳥が飛びました。窓の向こう、遠い空に小さく、鳥の影、それが平面的には褐色の蘭の頭十センチ上を水平に横切ったのでした）見開きかけた時に、褐色の蘭はわたしを振り向き見たのでした。
笑みもせず。
はじめてそこに人がいることに気付いたかのように（人？...いや、生き物？...いや、生き物のというものがあること自体彼女はそのときに認識して居なかった。
なら、わたしは人でも生き物でもないひどく抽象的で、あくまでも目の前に存在する具象だったにすぎない。
これに屈辱を感じるべきですか？）

わたしは思いつきました。彼女を描くだろうと。
わたしは彼女を描くはずなのです。実感として...頭の上に止まった蝶がその数本の髪の毛の全体に実感を消し難く残すに似て、わたしは自分の実感を咬んだのでした。
夕方、タオはわたしの頬に口づけました（あなたを傷つける積りはないし、嫉妬を煽ってやろうという穢らしい感情から云うのでもありません）。彼女にとってそれはとても重要だった。初めてわたしの頬にふれたのだから。
まえぶれもなく、蘭をつれて歸るそのドアを開いたときの振り向きざまに彼女は爪先立った。
蘭は見ていた。
まるでそこに植物が存在しているかのように（ならば、わたしが蘭と呼ぶ少女のその一瞬に、わたしたちまでも同じように蘭にもひとしい自生の植物だったのだろう）。
タオは唇をはなした。
ほんの二秒ばかり私を見詰めた。...ごめんなさい、と。タオが微笑んであわてて駈け出るのを、わたしの眼は勝手に見出していた。笑みもせずにタオは私を見詰め、茫然とした、——むしろ自分が侮辱されでもしたかの、そして驚嘆のあまりに侮辱された屈辱さえ感じられないでいる軆の、開いた瞳孔をだけさらしていた。
「歸るね」
タオは云った。その儘に、唇をだけ動かし、喉をだけ震わせ。
「また來るね」
タオは云った。
わたしは瞬いた。
彼女は帰った。（これらの一連は、あなたには隠すべきだったのでしょうか？ そのほうがあなたは幸せだったかもしれません。でも、卑劣な、悪意ある幸せだとおもいませんか？ 卑劣さも、まして悪意などいささかも意図されなかったにせよ、です）
それから今まで、なにもできずにいる。
ただ、雨の音を聞いているのです。
８月 15 日。
今日朝起きた時のあなたの心がよくわかる。昏い昨日一日中の白濁の空がそこになくて、青い空のひがるのをみたあなたの...部屋のカーテン越しの明るさに、あなたは心があたたくなるのを感じたんでしょう？
これは昨日の夜中の夢の中に、今朝のあなたが語ってくれた事なのです。
夢通い、というのか（日本の中世の考え方ですね...）どうも、今現在の我々の科学的認識よりも当時の彼等の科学的認識の方が、例えば五百年後の人間の（まだ生き残っていれば、ね？）科学認識に照らし合わせると、結果的には彼等の認識に近かったという事実が判明するのでは？
神秘主義でもオカルトでもスピリチュアリズムでもありません。昨日の夢の中であなたと話し合った結論だったはず。覚えてないよね？ それはあくまで私の夢、あなたとわたしが私にだけ捧げた夢だった（ふたりは喩え同じとき同じ場所にいても違う世界を生きたのだ...是は意識の問題じゃなくて。あくまで肉体の問題です。意識には本来私も他もないからね。いかなる固有性も...）。

明かる日差しに目覚めたあなたが羨ましい。妬ましい。朝から雨が降っていた。
雨の中にホテルに来たタオは髪の毛をかすかに濡らしていた。
わたしは心が痛んだ（なぜ？...野に走る鼠は雨の中に川を泳いで渡るというのに？...猫は樹木に登る）。
蝶と蛾が雨に濡れてはならない。
タオの濡れた（かすかに。ほんのすこしだけ）髪の毛に蝶と蛾のかがやきの粉舞う羽根を思った。
ちょっと休んで云ったら？
昨日のことを忘れてわたしは云った。タオはどうだったろう？
覚えてゐたのだろうか？
時間ないよ。
甘えた声を立てた（彼女の日本語に訛はありません。京都に七年いたというのですが、きれいな標準語なのでした。日本では、ほとんど日本人と話す機会がなかったのかもしれませんね。テレビ画像とネットのフォント乃至動画の中に存在してゐるだけで）。
いそがしいの？
いそがしくないよ。
だったらいいじゃない？ 濡れてるよ
だいじょうぶだよ。行かないとだめだよ。
また、濡れちゃうよ。
しかたないよ。
それらの会話の間中蘭はひとり部屋の奥に入って、勝手に私のタオルで濡れた髪から顔、額から腕、手のひらにいたるまで、彼女はぬぐい取るのだった。
本当は計画があった。例の水浴が...あなたも、磐田くんも、兼安も、だれも。みんながやめろと言った、あれ。
非生産的、とね。けれどもわたしは現代の一瞬の現在に殉じるほど今を愛していない。尤もモナ・リザの永遠をなどもっと愛していない。モナ・リザの、最後の審判の、乃至源氏物語絵巻の、最悪の愚劣はそれらが今だ燃え尽きも滅びもせずにそこに存在してゐることだ。
水浴画のスケッチに海に出ようと思った。蘭を連れて。そして山の方にも、バイクで。蘭を載せて。
今日するべきだったことは以下です。
様々な浪の形をスケッチする事。
様々な飛沫の形をスケッチする事。
耳に鳴る漣の音、それをスケッチする事（是はなにもわざとこ難しく困難なことを晦渋めかして言おうとしているのではない。あくまで、これは具体的で、むしろ具象にかかわることなのです。形而上学談義では決してない）。
樹木の形を手あたり次第スケッチすること。
先ず、その幹の形。
困難な葉についてはまた明日。...か、あさってか。
以上の事柄だけですでに膨大な時間が必要ですから。いつになるのだろう？ 葉のか

たち...
光がすべてをじゃ魔するのです。
おなじ葉にさえかたちそのものをへんようさせる、あれ。われわれにし覚をあたえた（正確に言えば視覚がそれに寄生する事ではじめて自分をあらしめたところの）ひかりこそが。
ぶっ陀のひかりなんていってるんじゃないですよ？ い前、あなたをなやませ、かなしませたわたしの「妄想」(...妄想じゃなくて、それは一つの理論的な思考に基づく、比喩だったのです。遂に、比喩を用いなければ語れない事実もあるのです。ヴィトゲンシュタインは云った、語り得ぬもの、と。ニイチェは云った、永劫回帰と（また、優れた指揮者は云うものです、私の棒など見ないでください、とね。むしろ目を閉じていてくれたらいいくらいだ、と。音を聞くでも自発性でも音楽そのものの流れへの忠実でもなんでも、理由はさまざまであれ、ね)。そうじゃない。
ぐたい的なひかり（あなたを哀しませたわたしの佛陀の光はもちろん、わたしの悲しみの発露でもありました。わたしは多くを失っていましたから。もちろん、あなたも知る例の母の一件もむくめて。いずれにしてもあの頃あなたが私を愛してくれていなかったら、それが職務倫理からいえば御法度だったには違いなくとも、ですよ？ わたしは多分今頃肉と骨と血を持つ磐になっていたでしょう。花咲く春先の奇跡的なただ一夜の雪さえ梅雨の雨にひとしかったはずだ)。
ともあれ。
他にすることがないので部屋で蘭をスケッチしたのだ。
そのときに私は今日の雨が寧ろわたしに蘭をみせる爲に降ったに違いないとさえも確信させることになった。
それはかならずしも美しいとは言えない顔だった（美しいというとき、そこにはかならず放棄がある。具体性をはなれ、乃至特異性をはなれ、その一言に堕してしまう放棄、まなざしの絶望的なまでに驚嘆しているそれを、眼差しに放棄させること...)。
何が悪いと謂うのでもない。それぞれは正しい位置に正しくあるのだが、見つめるうちにそのそれぞれが、又全体としても怪物じみて見えてくる。異形の奇形のなにか、に。
蘭の顔を見ていると、性欲というものの視覚における意地汚さがよくわかるようになる。つまり、発情するというのは見得たものをかすめるだけであって、眼差しがそれを執拗に捕え続けている限り維持できないということ。指先がふれるものだと一瞬に匂わされればいい、文字通り単なる発火罪に過ぎないと、ね。
事実、あなただって多くの場合、目を閉じた暗闇に私を愛したはずです。私を見もしないで...
いずれにせよ蘭を窓際にすわらせた。
光の入り込むにまかせた。
斜めの光はたしかに刻一刻と（——北向きではないので）あざやかなほどに色彩も、形態も、おそらくそもそもの骨格自体さえ変容させていく。
そのなかに彼女の（此の、おさない褐色の少女の）かたちはすさまじい怪物的な相貌を見せつける（——わかるでしょう？ なにも鼻が二十センチあるとか口に牙があるとか目が三つあるだとか、そういう怪物性ではないのです。

その目が、その色、形、あるいはもはやそれがそこにあるという事実自体が、すさまじい怪物性をもって、. . . 怪物其のものとして、わたしに咬みついてくるのです)。
ひるむ？
まさか。
怯える？
まさか？
逃げる？
まさか。
わたしはただ見蕩れて仕舞ったのでした。その怪物性そのもの。例えば本当に一凛の蘭があったとして、その蘭の葉そのもの、花びらの潤いのそのもの、茎のかすかな毛羽立ちのそのもの、それが怪物化する現状. . . わたしが心奪われたのはそれです。
夕方、タオが帰って來た時には心身共に疲れ果てて居ました。
ドアをあけるなりタオが——どうしたの？
そう云ったくらい。
——綺與宇さん、顔色わるいよ。
蘭はなんということもない。ただ座っていただけだから。
タオが歸ったときには立っているのも不可能に感じられた。だから、ベッドに倒れ込んで少しの間、たぶん、失神したのかもしれない. . . 眠った。その時にあなたの夢をもう一度見た。
けれど、それはここに書きません。
わたしの爲じゃない。私にとって不愉快だとか、書きにくいとか。そういうことじゃなくて、むしろあなたのプライヴァシーをまもる爲。
あなたが此れをやがて誰かに見せることはわかってる。だから、あくまであなたの爲。
私が書くのは、あなたを傷つけないですむ事、のすべてなのです。
夢から覚めて更にわたしは茫然とした。
夢が私の心を干からびさせてしまったようにも感じた。
以上。
今日は、以上で。
８月 16 日。
あなたと同じように、雨の中に目を覚ました。
今朝、なかなか起き上がれなかった。体調は悪くない。そうではなくて。
只管憂鬱で、６時に目を覚まして、それからベッドに横たわっていると、母親が現れた (——夢。夢ですよ。
判ってる。
いつか、眼をひらいたまま転寝て、そして眼差しはその奥の方に夢を見始めたのです。
夢から覚めた時の記憶さえある。
. . . 夢。心配しないで。願う。
遠く離れすぎて何もできないけれど、あなたの心のざわめきふれて、そしてなだめてあげることさえできたら. . .)。
母は. . . 多香美は。彼女、私を見た瞬間に笑った。

壁際にへばりつくように蘇生した体躯に出鱈目に生えた両腕は垂らして、なぜか汗をしたたらせつづけたまま（たらちねっていう言葉、在りますね？
あれ、思うに垂らす- 乳から來たんだと思う。
垂ら- す、乳を、唇に。
垂ら- 乳- 根。
たらちね。——イノチを垂らすもの。
たとえばくらい水面に一滴の乳の雫が垂れて、そのただひとつの色彩をのみこみながら波紋は拡がって行くのだろう。
どこまでも...）僕を返り見た。
いつか話したでしょう。
目は只管澄んで向こうまで見渡せるはずだと思う。
けど、見得ないの。
多分、人間の視覚、乃至、人間が視覚として認識する視覚のあり様とはべつの視覚以て見出されるべきなんでしょう？
ブラックホールの事象の地平が決して見いだせず、けれどもそこに事象が存在してゐるように。
かりにそれが我々にとっては事象（即ち時間と空間の...）とはいえなくとも、そこにはなにかが発生している。
向こうになにがあるのだろう？
彼女は...多香子は、わたしにその腕を伸ばした。
ぼくは雨の打ち付けていたの気付いた。
紫陽花が匂った。
すぐ近くで。
降る雨の中で（どこだったのだろう？
降る雨以外に私には認識できないのだった。）彼女は...香香美多迦子は僕を腕に抱いた。
子供だった？
幼児だった？
あかんぼう？
それは判らない（ぼくには知覚し得なかった）。
彼女は僕は喰うのだった。
貪る？
牙を以て？
まさか。...いつくしむように。
むしろ僕を癒そうとたくらんだかのように。
あたたかさが広がる。
吹き出し、零れるように。
雨の音...
誰にも、僕にも、母にさえも、もちろんあなたには聞くすべもない雨が、ただそれ自身の必然においてみずからの音と共にあるのだった。
僕は聞かなかった（それは僕の過失だったろうか？）。

拡がるあたたかみが、それはまさに僕の喰い千切られた腕の飛び散らせた血が僕の皮膚に与え得たものだったことに気付いた。とっくに、僕はそれには気づいていたのだ。もはや僕は痛みそのものだった。
其の時には僕には痛みしか存在しなかったのだった。
鹿なのだろう。
雨に濡れた傾斜を駈ける何匹もの足跡が聞こえた。
地を蹴る。
地をわずかだけ削り取ってしまいながら（なぜ大地は沈黙をまもるのだろう？
たとえそれがもっとも淺い部分に過ぎなかったにしろ、僕らが好き放題穿ち堀り起こして仕舞ったというのに）。
僕はまばたく。
僕の身体は痙攣しているのだ。
痙攣する筋肉が、噛みつき肉をはぎ取ろうとする母の唇に困難を与え、僕はまばたく。
母の唇がいっそう無慈悲に肉を齧むのを強制する。
僕の肉体の痙攣が。
僕はすでに気付いていた。
あるべきだったものを、あるべきかたちに。
起るべきだったことを起るべきかたちに。
...多果子はていねいに直していたにちがいなかった。
多伽子の唇の先にはやわらかな歯が白く鮫のそれのように密集する。
むりだよ、と思う。
僕は。
そんな、...そんなにもやわらかな歯で。
噛み千切られた血の玉が空中を舞うのだ...と。
耳はノックの音を聞く。
誰が来たのかあやしんだ。
あなたが？
まさか。
ドアを開けたそこにあなたが微笑んで居ればよかった。
そうすればすべては救われるのだ。...そう思った。かつて、僕が裏切って、そして捨てて仕舞ったあなたも（本意ではなかった。
あれ以上、あなたを傷つけるわけにはいかなかった。いまや、國さえ捨てて仕舞った...）
其の時はじめて僕を赦すだろう。
僕は、僕を赦すのだろう。
ベッドから立ち上がってドアの前に立った。
ノックの音が聞こえた。そのやさしい、伺うように不安げなそれは、僕の耳にだけ叩きならす轟音として聞き取られていた。本当はあなたの事など考えてはいなかった。
僕はそこに母がいるのだと思っていた。
ドアを開けたら、タオが蘭を連れて、そして私を見た瞬間に微笑んだ。
おはよう。

鼻水を鼻の奥で噛みながら話す、そんな甘ったれた高音を耳は聞いた。僕は已に知っていた。夢から覺めたのだと。
ぼくはタオを、そして蘭を招き入れた。
今日もタオの髪はうすく濡れていた。
蘭の髪はあえて見なかった。
僕の耳はそれ以上ノックの音がないことを確認しつづけていた。
それから、ぼくは一日中なにもやる気が起きなかった。
あの時、僕が多香子を殺したのではなくて、多伽子こそがぼくをころしたのだと。
僕は多迦子を罰したのではなくて、多伽子こそが僕を罰したのだと。
僕にはそんな印象が残った（でも、知ってたんだ。
それは愚劣な、無意識的な意識操作だとね。僕は僕を無罪化しようとしていた...）。
一日中、窓の外を見やる蘭の横顔を眺めて暮らした。
不意に想った——いつ？
何のきっかけで？
わからない。僕のその思い付きは契機が存在してゐない...なぜ？
蘭を書くだろう、と。
今に始まった思いっではなかった。
そのときにも、「あらたに」思い附いたのだ...僕は何度目かに、「思いつき」の時間の中に存在したのだろうか？
蘭は降る雨を見て飽きなかった。
僕は彼女の横顔に、彼女の目を通して一面の降雨に濡れる海を見ていた（これは実感として、まざまざと現実的に見たのだ）。
美しい風景だった。
絶望的なまでに、人の眼の存在しない風景だった。
ただ、無慈悲なまでに美しいのだ。
夕方タオが迎えに来た。
ほんのすこし、部屋で時間をすごした。
彼女の心の震えは僕にはあきらかに感じられていた。
何に怯えているのでもない。何にも。
また何を案じているのではない。何にも。
懊悩？
逡巡？
不安？
悲哀？
...何にも。又は、何をも。
ただ、心がかたちもなくに、そのくせ音をだに立てて震える...わかるでしょう？（戀したとがあれば。判るでしょう？ あなたの心はたしかにふるえた。
生まれて初めて。
僕を知った時に）
帰り際に、彼女は開いたドアに手を添えて言った。

——あしたは、休みだからね。
下を向いて、決して私を見ずに。
——休み？
——会社、休みだからね。だからね、
と。彼女は自分がわたしに何をも伝えられていないことにさえ気づいていないのだった。
だから、彼女の爲にわたしはささやいた。
彼女にだけ。
——明日は、來ないの？
聲を、タオは耳に聞く。
そしてその聲の脳裏に残した聲を、彼女はもう一度聞いた。
——休みだからね。
其の時に彼女の頬が赤らんだ気がした。
——きてよ。
わたしの唇はそうささやいていたのだった（——なぜ？
と。なぜ、彼女を呼ぶの？...そう問いただす間さえもなく）
——なんで？
ようやくにタオは私をみるのだった。
顎を上げ、上目に。
背後の照明を、わたしはタオの前に覆っていた。
だからかのじょは私の作った翳りの内側にいた。
彼女には見えていた筈だった。...あわい逆光の中に微笑むひと。
——描いていい？
ささやく聲。それはわたし。
——なに？
——タオを、描きたい。
わたしは云った。その時にわたしは気付いた。水浴に、その女の中に、タオも居たことを。
——わたしを描くの？
——いいでしょ？
——書きたいの？
——描きたい。
——美容院いかないと。
わたしは笑った。そのままでいい。そのまま...と。わたしはささやく。
どうしよう？ とタオは謂う。
惑う。彼女の心の中では、彼女以外の誰かの心が惑っているのだ。彼女が夢みた他人の心が、ね。何時にくればいい？ と。タオは云った。
十時くらい？
わたしは云った。
どうしよう？
タオは云った。だから、傍らに姉を見詰める付ける蘭をみながら、私はタオに言った。
来るよ。タオは。

蘭はわたしを省みた。
その、そこに自生した蘭をでも見るような目で。
——わからないよ。
タオ。
——くるか、どうか、わからないよ。来なかったら、...来なくても、...ね。怒らないで。
そう云って、タオは歸った。
８月 17 日。
夢の中で、あなたはバルコニーに出て鉢植えの花に水をやっていた...だから、今日は晴れてたのかな？
すこし、ユニークな夢だった。
その鉢植えの花、何だと思う？
紅のポインセチア？
淡い白のカサブランカ？
黄の？ うす紫の？ チューリップ？
うす紫の滲んだ百合？
向日葵。
あなたが栽培していたのは向日葵だった。その種なす部分の粒ひとつひとつに夥しい向日葵が花づいていた。だから、そのひとつひとつの種なす部分にもさらに...。
夏の風に夥しい向日葵の花粉が匂う。
あなたは僕に気付きもしないで、鉢に一本立った無際限の向日葵に水をそそぐのだ...
十時にタオが来ることは知っていた。
だからホテルに言って、となりの空き部屋をもう一つ借りた。そこはアトリエにする積りだったのだ。言って、ベッドを片付けさせた。ホテルの人間はしぶしぶ従った。
それから、町の真ん中の画材屋に行って、あとで今ある一番大きいカンバスを持って来いと云った。
2.9Œ1.8 の 300 號ならあると云った。私は答える、それでいいと。それから絵具。ホルバインの者しかなかったが、それでいいから全種類四本づつ持って来いと。
白もか？ 黑もか？
全部といったら全部だ。
画材屋が正気とも思わず文句言い云い食い下がるので、最後は怒鳴りつけて遣った。彼には理解できなかったろう。
十時三十分過ぎたころに、ちゃんと化粧したタオが妹を連れて来た。それなりに、良家のお嬢さま風のいかにもかわいらしく、且つ露出のすくない清楚な暖色のワンピースを着て。
タオは明らかに私を意識して、口から心臓を飛び出させそうに見えた。
部屋の中で一息入れて、不意にあわてるように、見つめるわたしに、きれいにかいてね、と。目を剝きながら媚びを売った。隣のアトリエに連れて行った。まず最初にわたしは彼女を失望させなければならなかった。シャワーを浴びて、化粧を全部落とせ、といったのだった。
あたりまえでしょう？

他人が書いた顔をなぜさらに私が書かなければならいだろう？ ルーブルで模写しようとしているわけではないのだった。
タオは戸惑っていた。叱られたような顔を、だからわたしは云った、「わがままでごめんね」と。
彼女が笑んで、いいよ、と。そしてシャワールームに消えたときに、画材屋が到着した。念入りな入浴だったとはいえ、もうシャワーの音が聞こえなくなってずいぶんたっていた。画材屋は二人係だったが、サービスでカンバスを組み立てると謂うのだった。その前に入り口からカンバスが出る者かどうか上下寸だけ量っていた。大丈夫だと笑う。わたしは無理なことに気付いていた。横がながすぎて通路には出れないだろう。出たとして、エレベーターに入る譯はなく階段をまがることも不可能だ。組み立て前の木材の状態でさえあれほど彼等が苦労した事実は彼等にはすでに忘れられていた（ここにきたときにはふたりとも肩で息をしていた。木材を抱えて階段を上ったのだった）。
出ないなら出ないでよかった。
いざとなればホテルごと破壊して仕舞え。
火をつけて。ホテルごと燃やして仕舞え...
タオはシャワールームの壁の向こうで、外の物音を窺っていたのだった。
自分一人でも不可能ではない（...モナ・リザ寸のそれの数倍の面倒くささはあるにしても）。原理的には大きなものも小さいものもすることに変わりはない...
画材屋がお互いに怒鳴り合うように指示しあい文句を言いあいながらカンバスが出来上がった時、時間はすでに 12 時近くになっていた。画材屋は私まで共に汗水ながしたかにも錯覚してさかんに労い、勝手に労いあいながら歸った。丁度晝だから、返って祝杯でも挙げるのかもしれない。彼等がゐなくなって、壁面一面を占領したカンバスの埃をタオルで叩き落としている時に、タオはようやく外に出て来た。
髪もふたたびあらったのか。
ぜんたいに、かすかに霑れていた（濡れた髪の匂い...それには生物学的な、ひたすら陰湿な、どうしようもないあられもない屈辱がある...そんな気がする）。
蘭はバルコニーで海を見る。...画材屋が来ると同時に逃げ込んだのだった。壁もなにもない自由な空間の中に、ひとり。
出て来たタオは私の背にカンバスを見て、叫ぶ。これに書くの？ 思わずに大きな声を立てて。笑みさえせずに。
タオは何の飾り気も無く、素直に驚愕だけしたのだった。
カンバスに向かって正面壁際に彼女を座らせた。そこしか場所がなかった。彼女が緊張しているのが分かった。同時に、恍惚？ までいかない、低い處にとどまった、横に拡がる高揚。
興奮。性的な、とはいえない。性的な感覚のすべてをまでふくんで、にもかかわらずそれそのものとは形も場所も同じくしないもの...やわらかいひっかき傷のような。
タオの眼は瞳孔を拡げて、そして眼の前の私の方を見ながら私を通り越した向こうに、それでも私をだけ見つめるのだった。
スケッチブックももたずに彼女を見つめつづける私を、タオは訝しがらなかった。
なぜだろう？

見つめられている事自体にしか、もはや彼女は気付いてさえゐなかったのだろうか？
私がしたのはただ彼女を見つめるだけだった。
タオがしたのはただ、茫然の内に時に瞬くだけだった。
三十分ばかり...ないし、一時間近く、私は見つめ、彼女は見つめられた。私は我を忘れることはなかった。すでに昼食にも遅くなりかけた時間であることは気付いていた。ベランダのタオにパンを買ってくるように金を渡した。彼女が一人で買って来れるかどうか、わたしは知らなかった。タオはそれにも気づかないように見えた。
左り肩の際に立って、私がいた方の壁を見詰めるタオを見た。
斜めに見下ろして。
白い肌のきめの細かさ、及び、不意の、吹き出物迄いかない生き物の皮膚であることのあざやかな証明、ひと肌の白さのもつ様々な色彩夾雑...雑多で、収拾不能な...贅肉の、微妙な波立ちのような、...目を凝らさなければ見えない、息吹のような気配。
それら。
やがてタオのつま先のさき、タオの影がふれる寸前に留まる。
わたしは蘭を見た。
蘭は私を見ていた。
言われたのとは違うものの、彼女は手のこんだ菓子パンを、わたした 10 萬ドン紙幣で買えるだけ買い込んでいた。
紙袋から一つを取って、そして殘りは蘭に遣った。
タオの唇に、千切ったパンを当てた。
——お腹すいた？
何か言いかけたタオに、わたしは云った。
あわてて。
——動かないで。
わざと、ことさらにあわてて。
右の方で、壁にもたれて座り込み、容赦なく貪る蘭の、すすりあげる音が聞こえた。犬がミルクを急いで飲んでいるような、そんな騒音。
タオは恥をかかされたかの、陰湿で、惨めな色を眼差しと眉間に一瞬、曝す。
——じっとしてて。俺が、食べさせるから。
タオは私に言われるままに、わたしの与えるパンを咥え、咀嚼した。軈てグラスに注いだ水を、私に与えられた儘に吸い込んで霑う。
此の日はそれで終わり。ふたりは５時半には帰った。
彼女がしたのはわたしに見つめられること。私がしたのは見つめる事。蘭は貪った。パンを。そしていつものように暇を。昏い獣じみた眼で床に座り込んだままに。
歸り際、タオは一人で疲れ切った顔をしていた。いまだに麻酔注射が醒め切っていないかの。
彼女たちをエレヴェーターにまで送って、それから部屋に（寝室に）帰って、そうしたら自分が空腹を感じているのに気づく。
それから、一度だけ窓の外、昏む海を見た。
青みを濃くした海は浪のせいで色を澄ませはしないのだった。決して。海の色は常なる

狂騒と混乱、破綻と破壊と破滅の連鎖なのだ...
外に出た。角を曲がった時、まっすぐ一直線の通りの、やがてのカーブの木立に盡きた向こう、何かの翳りのぎざつきの上の一面、空の夕焼けの撒き散らした紅蓮を見た。
それはすさまじい色彩だった。
あらためて言葉をうしなうのだった。
８月 18 日
空の上に...雲の上に、たたずんで下を見下ろすあなたを見た...下は、晴れ？
それとも東京にいないのかな？
ともかく。
今日のタオは朝の九時に來た。蘭を連れて。
彼女がノックした時、わたしは実は今日彼女が來ることを忘れていたのだった（...なぜだろう？ そのくせ、描いている絵の事は忘れるどころか...下塗りさえしていないにも関わらず、私にとって大作はすでに私にとりかかられているのだ。そのことしか考えて居なかった。繪、水浴画のこと以外、一切考えられてはいなかったのだ...)。
彼女はいつにもましておじけづいた顔をしていた。緊張と恍惚を解きほぐす術は私にはなかった。
タオは云った。呆れたように。冗談めかしながら、最初、アトリエの方にいったのだと。居なかったね？ 行ったのに...居なかったから、こっちに来た。
鼻水を咬むような甘え聲で。
彼女にとって、私は已にカンバスに没頭しているはずだったのだった（或は、事実としてそうだったのだった)。彼女はなにも失望していたのではなかった。寝室にいた私に。ただ、自分が体験した事実に軽く驚いていたのだ。
私は彼女をアトリエに誘う。
蘭もついてきた（彼女は時に私の匂いを嗅いだ。前からそうだった。最初に逢った時から。
彼女は鼻のかぎとる匂いに何をみているのだろう？)。
椅子に座らせると、最初からスケッチブックを手に取った。
メイクは何もして居なかった。
少しだけスケッチを...何枚か。途中で中断した後に（描き上げることに意味などあるのだろうか？）タオが髪を束ねていたので、そのゴムをはずして、そして指にといてやった。
ありがとう、と。やや遅れてタオは云った。目を伏せもせず、私を見詰めて。
脣がなにか云おうとした。
なにも云わなかった。
立って。
と。わたしは云った。
ダナンはその日も雨だった。もう何日続けて雨が降り続けるのだろう？
治水の劣悪な國だった。どこかの鄙びた山際で、土砂でも崩れているのではないか？
ホイアンは水没しかけているに違いない...水害が名物なのだ。
立った姿の斜めに日が差した。

朝の日が、ながく床に翳をなげた。
私は膝間付いて、彼女のシャツのボタンをはずした。
タオがささやいた。...脱ぐ？
私は答えなかった。上目に、そしてタオに微笑んだだけだった。
決意のようなものも無かった。タオには。ただ、わたしのすることを已に赦していただけだった。わたしは彼女の素肌をさらさせた。指は触れなかった。
肌に。
一度だけ、下着の肌に着けた、脇腹の痕跡をなぞった。
タオは抗わなかった。
羞恥はあった。あきらかに。
同時に、彼女は何を得た譯でも無い儘に、ひとりで充足していた。
もうすぐ、時間と共に、下着の這わせた痕跡は肌になじんで消えて仕舞うに違いなかった。
最初はまっすぐにたたせただけだった。
スケッチブックに、様々な影が踊った。
デッサンは、色彩を捉える行為だ、と。そう、誰かが云った。逆説的に、でも、それ以外にデッサンが成立する術はないのだった。
軈てすぐちかくに、...触れ合いそうな距離に、見つめた彼女の細部を移し始めた。その目、瞼のかたち、二重のその構造、瞳のひらめき、ゆらゆらする白濁した反映、それら。
鼻筋のまたは頬の。
唇の。ほほから唇に至るおうとつ、皮膚の持つ色。
色合い。
質感、皺の。
唇に発生する、様々な。
彼女の眼にスケッチされる影は見えていた筈だった。
彼女の瞳はそれを見てはいなかった。
最早わたしをさえ見ていない気がした。醒め乍ら、彼女が失神しているに違いなく思われた。
離れた距離に、彼女の体温がふれないまま息吹いた。
息遣う度に乃至、失神した心にそれでもなにかがさざ波むたびに、唇に、頬に、瞼に、それらの奥深く、かすかなゆらぎが生じた。
わたしはそれを耳に鳴る音響のようにも感じていた。
私は見つめていた。
豊満な身体だった。流れるような曲線では無くて、蠢くような曲線。ふくらみ、陥没し、自分の肌の上に自分の肌の落とした翳りを這わす。
潜められた咽仏が、首の肉の向こうにゆらぐ。
鎖骨が絶望的なやわらかさで仄かな陥没を描く。
反対を向かせ、背中を描いた。単純な平面に荒れ狂うひそかな事象の群れ。
軈て両腕を上げさせた。頭の上で、手を握らせて、そして背伸びするように。
その周囲を膝間付いて回り、見上げ乍ら肉の流れ（筋肉の、筋の、贅肉の...）それらと

肌の、どの部分をとっても同じではない質感と、色彩と、それらの存在そのものを、見つめる。
聞き取れないささやき聲に耳を澄ますように。
両腋を腰にまでながれるすさまじい抽象美に、私は見蕩れもした。
タオはいまでも自分が誰なのか、ちゃんと認識していたのだろうか？
スケッチブックを変えた。
さなざなま部分の様々な息吹のスケッチが、それを埋め尽くしたから。軈て局部に近づいたとき、タオは明らかに羞恥した。さすがに、ということだったのか。わたしはベッドに横たわって、そして休むように云った。
已に一時を廻っていた。
だから、蘭に同じように 10 萬ドン紙幣をわたして何か買ってこさせようと思った。手持ちは 50 萬ドン紙幣一枚しかなかった。寝室に帰れば細かい紙幣があるのだった。だが、タオをひとりにして、時間を途切れさせるのを私は厭うた。蘭にその高額紙幣をわたした。タオにささやく。
——なに、たべたい？
自分のその聲に、ある行為のたったいま男のささやいた、そんな氣色があったことに私は気付いた。
そしてタオは、その聲の質感に同意し、同調し、媚び、寄り添いさえするように、かすかな、それでいてはっきりとした聲で云った。
——フルーツ。
蘭に果物を買いに行かせた。
隅に追いやられた、ひとつだけ残ったベッドにあお向けたタオの傍らに、わたしは音のしないように腰かけて（なぜ、そんな気遣いが必要だったのだろう？）、手を附き、そして光る窓の向こうのはるかなこちら、すぐそこにイ気遣うタオを見詰めた。
タオは息を吸い、吐き、そのたびに胸から腹部に至る迄のすべてを、息づかせた。
いつか、あまりにも陰湿な虐めをタオに施している錯覚に捕えられた。
残酷な心情、嗜虐的な昂揚も無く。
ただ、いつくしむ心の内に、だ。
タオがまばたく。
時に。
なんども、時に、まばたく。
言葉を、. . . 彼女をリラックスさせる言葉を思い附こうとした。
思い附かなかった。
その必要性も無いことは知っていた。
かすかに、タオが汗ばんでいたことに気付いた。
蘭はなかなか帰ってこなかった（. . . ことに、気付いたのは彼女が三十分ばかりの後に返ってきたときだった。それまで蘭のそんざいなど私たちは記憶さえしていなかったに違いなかった）。ビニール袋ひとつぶんの果物の群れを、蘭がわたしの傍らに差し出す。
彼女にシャワールームで洗って來るように云った。
蘭は、ホテルのサイドテーブルに置いてあった蔓編みの籠をひっくり返して、そしてそ

の中に果物を以て来たのだった。
私は彼女に持たせたまま青りんごを取った。蘭が差し出した籠から雫がしたたって、タオの腹部、へその上に墜ちた。
水滴はほんの数秒停滞し、震え、ゆらめき、持ちこたえたと思った瞬間に、息遣った曲線に流された。
陥没をぬらす。
私の手に取った青リンゴはタンの唇の近くに近づけられて、そして咥えようとした唇から引き離される。
唇がそれを咬みとって仕舞うのを厭うたのではなかった。
わたしは思い直していた。ただ、沁み込むようなやさしい思いが、ひたすらタオの爲だけに芽生えていたからだった。
私の齒は青林檎を噛み千切り、そして指につままれたその断片は瑞々しい光の反映と共に、タオの唇に触れた。
はんびらきのそれを、そっと、気付かれないように、めくりあげようとしたかのように。
唇はかすかにひらかれて、そして下の齒をなでながら、纔かに差し出された舌が青林檎を奪った。
タオは私を見詰めながら、軈てそれを咀嚼した。
私はなにも食べなかった。
ただ、タオの果汁にすこしだけ霑う唇と、一瞬の齒と、そして同じく、. . . いや、もっと短い一瞬の舌を見ていただけだった。私はタオに食べさせた。噛み千切るたびに、果汁の味だけが唇に、そして齒にふれた舌に残った。
満足したかどうかは知らない。
充たされるべき空腹があったかどうかさ判らない。
タオを見詰めながら立ち上がった時に斜めに窓越しの光が入った。
左目に。
私はそっとタオの足元に廻って、そして立って、云った。——足、拡げて。
光は傾いてタオの素肌を直射した。
雨の空、やわらかな、透明な光が。
ややあって、ようやくに——できないよ。
タオは云った。
——拡げて。
わたしは云った。
タオは沈黙する気も無い儘に、ただ、沈黙した。
——足、拡げて。
ささやく。
もう一度。
——見てあげる。
其の時に、タオが犬の乞うて鳴くような聲を、喉の奥にかすかに立てたのを聞いた気がした。
彼女の羞恥の爲に、わたしはいたたまれない思いに苛まれた。

拡げて、と。
もう一度言おうとしたとき、一度瞬き、そして眼をとじたタオは足を広げていった。
兩手に、頭の下の枕をつかんだ手の二の腕が震えた。
ちいさくだけ。
——もっと。
わたしは云った。
緩慢に広げらえ続ける太ももを、私はみてはいなかった。
眼差しの先に震える瞼があった。
そして、上向きの睫毛と。
——もっと。
限界までタオが広げた時に、そして傍らに姉の痴態を笑った聲を聞いた気がした。. . . 蘭の。
省みれば。蘭はそこに立ったまま、私を見ていた。
籠には果物が、半分以上残っていた。
わたしは頷いた。
食べていいよ、と。
立ったままに貪る蘭の咀嚼の音を聞いた。果汁さえ、空間に舞い散る気がした。
スケッチブックを手に、タオの太もものすれすれに近づいた時に、タオの喉から堪えがたい苦痛の聲が聞こえた気がした。
閉じられた瞼に、ともなく睫毛が震えた。
——見て。
私は云った。
——俺を見て。
タオは応えなかった。
——見て。
三度目に行ったとき、タオは目を開いた。そして斜めに下に視線をながして、私を捉えた。微妙に、かすかにだけ擡げた首が腹部に執拗な緊張を与えた。
——動かないで。
ささやく。
——そのまま、描いてる俺を見て。俺を
見つめながら。
——ひとりにしないで。
タオに。
蘭の咀嚼音が霑れた音を立てながら、頭の上の方になる。
タオは從った。
軈て、四つん這いになって、もうひとつの局部を曝させたときに、——開いた足の向こうから顎を引いて私を見詰めるタオの眼に顯らかな絶望の色があったのに気づいた。疲れ果て、諦めきって、もはやなにもなすすべはないのだ、と。
夕方、日が暮れかけてタオに服をきるように云った。
さんざんの嗜虐を盡した、そんな錯覚にとらわれた。——描いている間にかんじなかっ

た、あたらしい感覚だった。とはいえ、その匂いがあることには已にきづいていたはずだった。
服を、横たわったまま壁の方に目線を投げ捨てた彼女の上にかけてやりながら、あるいは蹂躙のかぎりをつくされたかの感覚をのみ噛んでいるかも知れない彼女に、いたたまれないわたしは部屋を出た。
寝室に返ったのだった。
窓の向こうに夕方が終わって、そして暗くなっても、わたしは証明もつけずに部屋でタオたちを待った。来なかった。
部屋の中に、窓の外のあらゆる遠い光源がさまざまな影をつくった。
アトリエを見に行くと、すでに誰も居なかった。たしにか、私の顔も見れずに歸るしかなかったのかもしれない、と。
私は思う。
タオの体臭がいまだに籠って停滞しているきがした。
窓を開ける気にもならなかった（なぜだろう？）。
その時ドアを絞めて気付いたのだが、蘭はおつりを渡さなかった。
青林檎にすもも、それから葡萄ひと房。梨。
ビニール一袋分で、どう考えても 10 萬ドンもかからない。40 萬ドン超のおつりが逢った筈だった。つまり、蘭は釣を窃盗したのだ。
窃盗という行為にはそもそも複雑な知性が必要なはずだった。自分の所有、他人の所有、手に持っている金銭の価値、そしてそれを手にする事によって自分が手にする可能性...蘭は庇護下に或るのだから、生きるための必要性等そんざいしない。ただ、彼女の遊興費になるか、ないし、守銭奴てきな欲望を感じているか、それ以外に紙幣にかちはない...。
彼女には人並みの知性があるのだという妄想が（まさに、そう妄想としてのみ、そのときわたしに想われたのだった）生じた。
私はかるいめまいさえかんじた。
あんな生き物に知性が？...と。
例えばプラナリアに知性があることを証明されたような、そんな驚きと不安...
８月 19 日。
タオはもう、來ないだろう...と。
わたしがそう思っていたことに、開けたドアの向こうにタオが笑んでいたのを見たとき、気付いた。
いつもの早朝。
邪気のない、上目遣いの眼でわたしを見ていた。
云った。
――今日も、おねがい、ね。
と、そして遅れてわたしは笑み、ささやく。
――今日、仕事？
――ちょっと、いつもより、おそくなるかも、ね？
蘭は正面の壁にへばりつて、斜め上を見ていた。

蘭が部屋の中に入っても、タオは行こうとしなかった。そのくせ、なにを話しかけるでもなくて、だからわたしは彼女を傷つけないように、殊更にやさしく云った。
案じたそぶりさえ消して。
——どうしたの？
——どうするの？
——なに？
——繪、かくの？
——今日？
——かく？
——今日は...仕事でしょ？...夜は、光が...
——ひかり？
——そう。ひかり。電気の光だと、どうだろ...
——そうだね、じゃ、つぎだね、と。
タオは鼻水を齧む甘えた声で言った。
タオが行ったあと、私は考えるのだった。照明の光だろうと日の光だろうと、それがいったい何だったろう？
スケッチとは言え、何の爲に書いてるわけでもない。水浴に下絵など存在してはならないのだった。デッサンはいくつもの、複数の、体験をするために或るのだった。完全な暗闇の中で、まったくなにも見得なかったとして、それでも眼差しの捕えるものを体験する事のほうが、寧ろ北向きの部屋で安定したスケッチをとるより価値があるかもしれなかった。
そもそも夜には月のひかりがあった。海辺の大通り沿いなので、人工照明とはいえ反射し反射しようやく部屋に進入する頃には、星のひかり月の光に等価の、むしろ取りつく島のない他人事の光になりおおせていた。
部屋の照明など消して仕舞えばいいのだった。
又、こう考え得る、あの女を壊してやろう、と。
その心を、完全に毀して、そのさきの彼女が見せるはずの眼差しに興味があった。
彼女はわたしを愛していた。戀し、焦がれていた。
ならば、私に彼女を壊して仕舞うのはたやすく思われた。と共に、私も壊れて仕舞うかもしれなかった、ならば、それもそれで面白くおもわれた...
考えるともなく考え、思うともなく思う、様々に。
窓際に立つ目の見て風景が、昨日に同じ雨の風景であることは知っていた。
耳がとらえつづけていたの雨垂れの音だった。
時に、窓ガラスの向こう、故にすぐそこにありながらもいや遠いその雨の瀟籦たる音に、ざつ、ざつ、ざつ、と。それ、背後になる耳慣れないノイズがあることに気付く。
心のあくまで冱えた儘、穴があいたように唖然として、そして私はノイズに耳を澄ませるのだった。
頭の中を、形のないなにかに喰う散らされている錯覚に、あやうく飲み込まれのそうになって、振り返ったわたしは蘭が貪るのを見た。
部屋のバスケットの中、備え付けのインストラーメンの、その容器を破いて砕いた乾麵

を、蘭は手づからほうばっていた。私を正面に見つめながら、気にしもせずに貪り、喰い、私の眼の間で喰い、貪り、軈て、我に帰ったからしい瞬間があった（——表情のなにが動いたというのでもなくて、ただ、そんな気配が何の変化も無い内に、匂ったのだ...)。
蘭はつかみ取った乾麺の一片をわたしに差し出したのだった。
ほら。喰えよ。
と。
表情はなにも、微動だにしない。
けれどもその時、蘭が笑った気がした。
餘りにも顯らかな実感として、だ。
私は其の時に、軽い発作でも起こしたのだろう。いまで起こしたこと無い発作（——あるいは、殆どすでに忘れかけているが、あの、十二歳の頃の、多迦子を殺した直後に起こしたらしい発作？
ただ、あのころは唯でさえ多感な思春期の入り口だったのである）を。
そうとしか思えなかった（それとも私がまたあたらしい扉でも開いて、つぎのステージにジャンプしたとでも？)。
私は蘭を殴った。
顔を、ではなかった。腹を（何故？——考える。
時に、思い出して、私は。
考える...
何故、腹？
顔はすぐそこにあった。身長差から、丁度狙いやすいすぐそこだった。
何故？...おそらくは、その皮膚に触れたくなかったのだろう。
わたしは、私の皮膚を。
蘭の皮膚になすりつけるような真似を回避しようとしたのだろう...だから、服の布地の上から殴ったのだ。二歩前にわざわざ前進し、腰をひねりさえして）殴ったのだ。
蘭の目が一瞬見開かれた（剝かれた...ひん剝かれた...）のを見た。
口は閉じた儘。
それ以外に、一切の表情の変化も無く、ただ、眼だけが見開かれ（剝かれ...ひん剝かれ...）た。
私は思った。
今、彼女の時間は一瞬停滞したと。
停滞？
むしろ完全に静止したのだ（——と思った時には彼女の周囲に、その遅れと誤差を取りも同窓としか猶時間の洪水が起こった。そのとき、彼女は我々の世界の、同じ片隅には決して存在してゐなかった。
確実に。
彼女は彼女として、あまりにも特異な異形をのみ曝していた）と、思った。
私はまばたくことさえ忘れた。
彼女がまばたいたとき（その見開かれた、...剝かれた、...ひん剝かれた、それ。目が）私は彼女が襲い掛かるに違いないと面行ったに違いなかった。するぬけるように後ろに

回り、彼女の尻を蹴った。
倒れ伏した蘭が（胸を打ったのだろう、一秒、二秒、一瞬、もう一瞬、蘭は息を詰まらせ）ながく息を吐くのを見ていた。
留めようがなかった（のではなかった。
けっして。
だって、わたしの心は纔かの熱狂どころかいささかの興奮さえ噛んではいなかった...僕は冴えていた。
心は冴えていた。
そして、だから、いやがうえにも醒めていた）わたしは、その背骨を踏み下ろし続けたのだった。
未だ呼吸の整わない儘に（是は蘭）。
一切、聲さえ立てず（是は私）。
そしてまばたきもせずに（是も私）。
兩足をひろげて（是は蘭）。
息も亂さず（是は私）。
腕を變な方向にまげて（是は蘭。骨が折れていたのではない。華奢な体の咄嗟の発狂状態に、関節が極度にさかさまに曲げられた、のだろうか？...骨折の事実などなかった）
唾液をふいて（是も蘭）。
　風に動く
　甘い酸つぱい秋の夢　石榴
　空にはぢけた
　紅寶玉の　火薬庫
なぜだったろう？
なぜこんな詩を、いかにも古典的な詩をおもいだしたのだろう？
わたしの足が蘭をまさに破壊するためだけに踏みつけ続け（心配だった。
はっきり覚えてゐた。
心配していた。——はたして背骨が粉々になったくらいで人間は死ぬのか、と。
水母人間になってむしろを彼女を自由にしてしまうのではないかという妄想。
妄想、そう、妄想、自分でもすでに妄想と知られつくしている妄想。そして。
にも拘らず？...
あざやかな恐怖）僕は時に、それでも醒めて、僕自身の暴力を、あきらかに冷め切って、僕は嘆いていたのだった。
この気ちがいめ...と。
僕は僕の去勢とかつてのロボトミーが行われる僥倖を願った（あるいは、もっと素直にいえばこう、...ころしちまえよ、こんな奴、と。
生きる資格あるの？
こんな奴...と。
死んでくれよ...
こんな奴...と）。むしろ、僕の醒めた心がいよいよ、僕の破戒衝動を鼓舞していたのかもしれない。結果的には（死んでくれよ...こんな奴...

どっかへ消えて...
こんな奴...)。いたたまれなかった。
わたしも、わたしに虐待される足の下の少女もいたたまれなかったのだった。その時にはすでに僕は聞いていた。
斜め上の壁。
そこにカマンベールを擦り付けたように、へばり憑いた顔、そのぶら提げた小さな躯体...
彼等はつぶやいていた（無数にいたから。壁にへばりついて、その小さな顔、その下のいや小さい躯体、それは無数にいたから）曰く、
——生きてていいよ。
擦り付けた顔。それらの。
——生きてていいよ。
骨格をでは無くて空間を曲げて擦り付けられた？
——生きてていいよ。
そんな見ず知らずの、他人事じみた畸形。
——生きてていいよ。
それが、ちゃんとしたいきものであることには気づいた。
——生きてていいよ。
いかんともなれば彼等には父親も、母親さえもいるに違いなかった。
——生きてていいよ。
ならばわたしより上位の人間ではないか、と思った。
——生きてていいよ。
わたしには生まれたときから父も母も居なかった、と。
——生きてていいよ。
私は時に確信していたのだった。

　通りすがりに　私は見た
　人影もない谿そこの　流れのふちに
　砥石が一つ
　使つたばかりに　濡れてゐるのを

正気付くと、顔の真正面に——すぐちかくに（くちづけする寸前、とでも？ ないしほおばる寸前、とでも？ もっとやわらかく、もっと切なく、ふれあう寸前の、とでも？）巨大な顔があった。
顔は形もなく、色もなく、青いさざなみを無数に立てながら腐り続けていた。
それは（——女。
だから、彼女、と。
本当はそんであげるべきなのだ。...腐った、滅びれない不盡の死者。永遠に生き腐れの死者たち、ないしとめどもなく死にゆき続けるだけの、もはや生きてなどいないものたち）私を見つめ続けていた。
そして語り掛けてさえいたのだった。
彼女の見出した私のすべてを？
人の言葉でさえなかった。

声でさえ。
獣の声でさえ。
なにもかも彼女は已に忘れているに違いないのだった。
かたわらに泣いた猫の長い鳴き声さえも、於麻非蔽波　於麻蔽波...と。
顔はささやくのだった。
　於麻蔽波　於麻蔽波
　喰宇多婁？
　喰宇多婁？
　あの古斗麿も喰宇多婁？
　あの佐留麿も喰宇多婁？
　吐かれるぞ
　吐かれるぞ
　くちからどろっと　吐かれるぞ
　古斗麿口から波迦禮留曾
　佐留麿口から波迦禮留曾
わたしは見ていた。彼女の見た風景を。あるいはここの、いつかの戦争の時の事なのか。
かのじょは横たわって見ていた。路上に。戦車でも通り過ぎた後だったのか。
灼けた、乾いた匂いがした。
向こうから全裸の子供がひとり走っていきた。。
彼女の許へ等ではない。
だれも見分けなど附くはずがなかった。彼女はすでももう十分焼け崩れていたから。
その見知らない子供は５歳？
蟹を正面に向かってむりやり歩かせたように。
幼児は走った。
その右手の草村に、男が一人身をもたげた。いまだ正気付かない儘、ぼろぼろのおとこは周囲を見回しかけ、其の時に横殴りの銃弾が男をなぎ倒した。
まぐれあたりに脳漿をふきとばして。我に帰った時に、足元には床があるだけだった。
少し離れたベッドの傍らに蘭が倒れていた。
私は冷静だった。
蘭が無傷だということは知っていた。私になにも混乱はなかった。ほんの二度三度で、わたしは辞めたのだった。だから。
私は思っていた。今、自分はあの巨大な顔を通して見ているに違いないと。
すべて、...私が現に見ているすべてを。ないし、あの無数の擦り付けられた顔を通して？
あるいは、顔を上げた正面たちつくして見つめる陽炎の眼を通して。
昏い、永遠に生き腐れ陽炎は躬を傾けて（もはやまともに立てもしないのだ。ひだりだけ肥大化し、膨張し、無際限に血の粒を玉散らす...）そのどうしても見えない眼窩の私の眼の見えない眼窩のそれ、眼差しをとおして。
私の前で、私は生き腐れのわたしを見ていたのだった。
私たちに差異はなかった。
同じものはなにひとつなくに、わたしたちに差異はなにもなかった。...

故に、かくしようもなく、彼は他者でさえなかた。
わたしは蘭をつま先で押した。
その、うつぶせた腹部の脇を。
脱力した（失神はしていなかった。正気付いていても失神しているに変わらない彼女は、いま、まざまざと目覚めていたのだ）蘭の腹部はいや生々しくぶよついた。
生き物の、やわらかな弾力。
私は彼女の襟をつかんで（. . . 白い T シャツを着ていた。湿っていた。汗をかいたのだろう。わたしのせい？ すくなくとも、私の棒力の？）無理やり起き上がらせると、蘭は自分の足で立ちかけて、そして後ろ向きに倒れた。
ベッドの上で彼女は撥ねた。
私は思いだしてゐた。
そもそも水浴に存在しているのは彼女だった筈だった。
タオが途中で割り込んできたのだ。
だから、もう一度やり直すべきにも思われた。
わたしは彼女を裸に剥いた。
褐色の肌が日にさされた。
直射された部分の、褐色の色をなくした白濁。
私は見ていた。息遣った。
蘭も（彼女はただ顔をそらして向こうの壁を見ていた。私を見る事を厭うたのではない。自然な体躯の折れ曲がったながれでそうなったのだった）息づかう。
腹部の上下がそれを私の眼差しにしらせた。
息の音はなにも聞こえない。
雨音は遠い。
私は彼女を描いた。
タオのノックが聞こえた時、時間の経過さえわすれたスケッチを私は中断しなければならなかった。ドアを開けた。その時に、わたしは私が蘭のことを秘密にする必要さえ感じて居なかったのに気づいた（あるいは、ぼうぜんとして、彼女の眼にふれることに気付かなかった、のか？）。
陽気な気配のタオは部屋の中に入るだに息を飲んだ（文字通り、その音をわたしたちは聞いたのだった）。
タオは見ていた。
妹を。
その目の色は見えなかった。
私には背を向けていたから。
彼女の（タオの。おそらくはタオの. . . ）髪の毛が匂った。
タオが振り返った。
怒りの表情も懐疑の表情も無かった（それらを通り越した？）。
タオは（斜めに暗い光にあたったタオの睫毛はうつくしい）云った（微笑みに近い、それでもそれにまでは到らない、曖昧で、やさしい. . . ）――帰る、ね。
それ、鼻水を鼻の奥に咬むような。

ふたたびベッドの方を向いたタオが、蘭を殴りつけるのを私の眼だけは見ていた。そうはしなかった。寧ろ彼女はいややさしくに妹に周囲の衣服を取って投げ、茫然としたままの妹に軈て着せ始めるのだった。

——明日も、来るね。

返りきわにタオは云った。

——ね。

ささやく（是はわたし）。

——あした、夜、時間ある？

蘭は笑んでいた。表情を感じさせない笑みだった。心が、たぶん、いまだ動き始めても居ないのだった（わたしにはそう思われた。実のところはわからない）。

——あした？

私はうなづき、彼女に笑んだ。

——そうだね、ちょっと、まだ、わからないけど、ね、のこれたら、のこるね。

タオはそういった。

出て云った。

外はいまだに雨が降っていた。

ふたたびタオはその髪を濡らすだろう、と。

私はそう思った。

奥書

以上は黎マに依って 2020.12.02-23. に書かれたものの第二部その前半

ホームページ

https://senolema.amebaownd.com/

多香鳥ー２

著　　　黎マ

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社